話發性柳川

二月號



(香養日一回一月報)號三歲卷三十萬 行發日一月三年一十四回 可單物便明建三萬日三月三年三十正大

る據に法紙聞新證保有は行刊の誌本

片瀬医学博士述 「安<u>産</u>のために」 進 呈



元 売 發 店商助卯田和 町修道 阪大

|| 句

報係

本社三月句會

有 保 證 刊 行 記 念

場 時 三月十二日(木)夜六時半 大阪市南區清水町電停北ノ辻西入北 得 与 (電話南四八八六番)

日

路 川柳マツチ 郎 盃 出席者全部に(庄万よし氏執筆)呈上 兼題天位賞として授與(出席者に限る) 講

演

川柳ご時事

兼

題

「明るい」三句

▼川柳雜誌スタンプは當日會場に備付てありますから御 自由に御使ひ下さい。

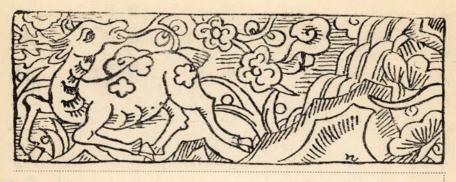
會 費 = + 錢

(幹事) みつる、原三郎、いわを、豆秋、世間器 川 都會人、春光、禿山 柳 雜 誌 社

主

催

5	人。来光、光山	る、原三郎、いわを、豆秋、世間曾	柳雜誌社	費三十錢		に備付てありますから御		役與 (出席者に限る)	6	13-	麻生路郎氏選		南四八八六番)	六時牛	F US	刊行記念	1	石。留	可言
支部句會は必ず前月中旬迄に決定して御報告願ひます。	伊豫相互貯蓄幕、名刺、土	神戸支部で、一日大倉山下八の宮包装紙、市街乙三十	今治 支部上 旬米屋町伊豫相互灸、鰯、遺言十錢 智	兵庫支部七十時衛生事務所丁五八以上某人選錢 席題天位呈賞 雖 支部二十五日兵庫和田宮通り芽 明珠選二十創立句會、兼題久	天王寺支部夜 七 時六四山本葉光居 彼岸 豆秋選十錢 豆	昭和町三石黒居貧春光選不要	時一プラジルカ	茶店香 水 汀柳郎	竹原町田承春居歌心同	南區疊屋	五 日神津神社裏 豆秋選銭 五	南區疊屋	大 鐵 支 部 午後五時 大 鐵 局 俱 樂 部執 着 艸樂選不要來 會 歡 迎九	七 時 日本樂器會社 軍國 かほる選不要	南區疊屋町	江支部在七 時天神町 來迎寺名所 前月選一十錢	七時未定縣 綠之助十錢	者 會費 雜	川柳雜誌社關係三月句會案內
	明明	楓	明明	**	秋	冬光	小水	夢	春	安	琴泉	波	天	さわ	外三	人	凡愚	係	



武

玉川二篇研究

川春

苑

寒 柳 し拾ひ手 指導講 座 のない首二つ 蛭森梅 塚 越 生 啞 秋 三 省東の正 路 二魚屋 郎 四

柳句百歸柳 偶 然の名 貨東 境 店 作は اتا 絕 味蛙か 對 訊 1= 5 記 な < 水 山 大 平 谷 谷 本

高 須子 本 井 五. 鮎春 花 村 美 光 味

武…

Щ

葉

光

朽

金大さい版が

色南

夜



		185 P	
表本編	柳各一	日粒近川	い名千
表には、表には、表には、表には、表には、表には、表には、また。	界地 集	日本 近川 本名所名 作 柳	る家庵
富市	茂	名物無樽塔	の春日譜
本 憲吉 · · · · (4)	主 祖 朱凤	柳(四國の卷	作
大社関係句會案内…川柳葉誌案内…川柳葉誌案内…	路郎	鞍馬·一徹;	
	艸 山山 樂 本本 汀 丹雨		汀 鳥 正 與 山 岡
路 線郎 主 幹 雨	柳 路迷 理 選選	健選並繪 路 郎 選 監 籍	春 • 史…(吴)



ない首二 寒し拾ひ手の

麻

生

路 郎

幕合に、幕の正面に「忠義の心選擧にうつせ た。忠臣歳の芝居を觀に行つたら、大石内藏助が、城明け渡しの あつ燗の一杯も押しつければ、頗ぶる和やかに運びそうに思はれ 前垂でも掛けて、イヤどなたも御苦勢様でと、關東煮の一ト串に を畏縮させたりするより、投票所へ模擬店でも設けお役人が赤心 をかけて、選擧肅正が叫ばれた。あんなに費用をかけて、選擧心 こん度の選擧は一寸風變りな選擧で、役人の手で、大變な費用 があつた。無闇と雪が降つた、二・二六事變が勃發した。世人のこゝろは暗澹とした。これ等事象の一端を川柳によ 淺春の夢を破つて第六十八議會は解散した。次いで粛正スローガン一手販賣の總選舉が行はれた。 大阪府」と商賣人 雷が鳴つた。

はだしの宣傳振りだつたが、コレは一を知つて二を知らぬ人のす

に大騒ぎしてまで汚なき一票を拒止することを國辱だと考へてあ までが、この時こそとばかりに選擧庸正のおべんちやら記事を書 た。平素、時事を書いたら印鑑携帯で呼びつけられる新聞や雑誌 る事だ。今日は忠義の心を芝居にうつしてゐるのにと思つた。お き立てたが、あの記事ばかしは印鑑携帯には及ばなかったらし 蔭で芝居はチッとも面白くなかつたが、 努力苦心のほどは 判つ の倫理教育が身に巡み込んである私は、多額の費用を投じあんな い。いつの世でも、おべんちやらはられしいものらしい。小學校

地震

取締る筈の巡査が、引張られる始末。

達に信頼をかけねばならぬ我等國民は光榮である。
はまことに心細い限りである。 汽車の一等バスをうれしがつ到ればまことに心細い限りである。 汽車の一等バスをうれしがつたり、その寒豪券について懐勘定をしなければならないやうな人たり、その寒豪券について懐勘定をしなければならないやうなに比べて僅にマシャと云うので入れたのに過ぎない。 思うて茲には大が出られたのも、社大の人たちが偉いからではない。 外の

社大の新代議士諸君へ

金は無くとも少しの愛をたよる嫁

のこゝろもちが判つたら、 社大もホントの人間味を發揮して既成政黨人の踵にキッスしないやうに心掛けて欲しい。

隠認自重も度が過ぎては後の鳥に糞をひっかけられたのに等し

の桂冠となり では、ドーン、パチパチで、 どんでん返へしほくそ突んだのも束の間、ドーン、パチパチで、 どんでん返へし

春寒し拾ひ手のない首二つ

の片棒を盛ぐ身となってしまった。

一寸先はやつ ぱり 闇だ 永田 町状が世とぞ思ふ春にはならざりし

田首相の背後にはお芝居めいた犠牲者が出た。

身代りの緋縅しぐらゐ着てゝ欲し

今の世に身代りなど、云ふことが、 いゝ事か悪い事が批判の母の世に身代りなど、云ふことが、 いゝ事か悪い事が批判の母

明日は我が身の置きどころ

範圍を擴大したそうだ。 局部的に行政戒嚴令下の東京になつた。 アドヴァルーを叩ってゐられるであらう。

ンは効用

呼びかくる聲は赤子よ兄弟よ飜へる文字は歸順の外になし

二・二六事變は數日にして平靜になった。 互鬼元大尉野中四に自決した。

二・二六事件忠 義の 裏表勅命に抗して悲し雪と散る

元老西園寺公館は杖を大内山に運ばれた。

建直し綾部でなくて興津の手

貢献することのなかつたのには一驚を喫する。のではなかつた。取締は取締、 國民の不安を一掃することに何等のではなかつた。 飼犬がお預けを食った形はあまり見つともいくもっだすがある。 飼犬がお預けを食った形はあまり見つともいくもこの事變で、その無氣力さをハッキリ曝露したものに、 新聞と

新聞は嗜眠症ラヂオは不感症

それにしても、いかに職業とは云へ殉職警官の死は悼ましい

とばしりで死ぬ悲しみを巡査知り

件は起ることを知らねばなるまい。(カットは常田音相で鈴木号号) 件は起ることを知らねばなるまい。(カットは常田音相で鈴木号号)

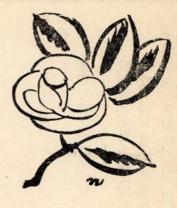
陽 見 ま ね H 深 2 を 本 酒 舞 T 探 病 7 茶 0 品 す 3 20 床 が 妓 た K さ IF を T 12 0 5 ま L 5 L 8 7 カン 3 2 た < き 多 を ま は 心 病 知 忙 b 人 を 3 人 T Ξ テ 0 粉 雪 蜜 味 1) 心 藥 を 柑 t 10 ほ 水 見 剝 0 0

仔

E

藥

3



JI

耽

亂

住

田

<

世

柳

塔

路

郎

選

判 は 靴 同 金 松 ち 下 L 0 h 7 持 取 年 h 1 ま を 綠 を 0 張 1: き 焦 そ 3 出 5 5 b 0 を が 人 L 力。 若 袋 L L 手 揃 T 5 を T ス Ł 5 袋 な 毛 冠 浴 丰 机 場 賃 唐 7 b 1 を を 10 子 4 0 0 旅 П 向 n 動 \$ 用 歸 高 で を 77 b Ł カン を 橋 脫 合 す E 足 な 云 3 か b b ぎ CL る 礼 L Ch ほ

る

會

頭 同 1 圓

0 安宅 = を

喜

U

は

彌

吉

思

CA

出

L

彌吉

商

I.

一會議所

會頭

祝賀

會一

月

廿九

H 來 +

出 ガ

L

た

男 寒

見

直

さ

n

七

2

街

0

3 が

K

歸

0

T

V 世 事 T ま な け 永 き Ł 田 懷 里 手 + 九

盆

栽

IC

H

曜

0

人

=

人

あ

ま

力

中 輕 b た 5 で 5 右 書 時 手 4 加 J. あ げ b

雪

0

朝

日

本

0 朝

家

根

0

低

5

2

Ł

月

-L

H

迷

本

雨

果

な <

き

は

行

5

0

上

動 T

我

が

掌

は <

を 3

持 な

0 る Ш

IT 山

出

0

額 2

ほ 來

ば 山

0

を

は す

L

ば

0 仰

を

合

は

さ き

n h

0

妻 な

な

移 合

信

K

生

カン

冬 子 水

月

は 寢

尖 顏

る 妻

露 0

西 寢 ~ Ł

^ K

尿 冬

向 0

け か

h

人

IC

な

n

ば

火

種

11

さ 亚

き

部

Ł

知

る

丸 云 南 ま

髷

を

ほ

8

る

Ł

3. 京

通

b

VC

な

0 な

T

虫 俺

0 10

る

た

10

0

h

<

0

Ł

V

3

損

が

あ

b

綠

橋 屋

本

雨

な 目 愛 茶 覺 0 0 歸 b 8 結 花 晶 \$ K T \$ Ł 霞 な 6 雀 は む ず が な か 刺 3 鳴 處 身 力 カン 女 妾 \$ 82 0 色 窓 あ 麻 カン 10 る 頃 生 は る 人 0 る る K 戀 葭

75

增 位 71 柳

病 5 素 4 平 あ 足 的 0 は 0 民 ゆ む n な L < 0 そ n 移 か 0 詩 は b ば K 35 慰 P 氣 雨 人 L \$ む Ł は 0 Ł 8 \$ ま 南 な 稱 0 女 下 0 b K 0 す 駄 灯 唄 雲 艷 拔 Ł p が を き 階 な あ 慕 カン 襟 3 借 b U b 紋

さ F. L 3 辻阪さん(二句 む イ 1 カン CL Ł 柚 5 子 な を ぎ L を IF n 大 ば 中 升 小 が 10 Ł 别 U け

須

崎

豆

秋

密 貧 葬 乏 籤 \$ DU ZL Ŧi. 5 町 T 0 辻 づ 阪 4 3 V h 1 哀 人 氣 九

食

場

沒

梅 世 諦 5 儲 最 寒 0 8 5 け 月 渡 終 緣 を _ 話 ~ b 0 77 人 猪 會 悟 0 る b 馬 首 辭 費 は E 鹿 0 0 令 0 L 見 正 人 酒 力 嘯 づ 直 6 が が 死 カン < 和 で 取 3 K 手 亡 b た 哀 8 炭 8 診 が る n 卷 力 覺 to 寒 な 斷 か 1 ち 書 文 さ b n b 某

子

恩 履 粉 笑 ち ボ 歷 0 U 雪 1 福 書 ぼ な ル 0 田 H VC が Щ 落 雪 な 自 6 雨 樓 ち が 殺 茶 利 氏 7 Ł 菓 L 殖 冬 子 为 云 手 陽 H 大 引 \$ 家 た 書 ば 映 Ł 貸 0 陽 畵 は 晋 L 館 Ł 書 \$ T 裏 變 吳 かい な

> す < 手 b n 失

師 眼 を 病 4 給 3. Ł 8 夜 0 ~

孫

曾

孫

並

~

莞

爾

Ł

逝

き

た

ま

U

父逝く(八

+

だ

6

L

な

V

夫

を

想

3.

新

272

3

1

ス カン

本

家

0

軒

で

5

0

2

<

U

で

\$

0

0

た

3

未 11

亡

人 が

實 惚

は n

若

3

を

\$

T

あ 知

ま

L ず 札

臟

T

る

る

Ł

7

承

世

去 親

る

\$

0

は

追

は

L

店

員

募

集

0

樣

な

男

Ł

添

S.

T

ぜ

5 市

to

<

紙

幣

DA

Fi.

枚

個

性

紛

人

岡

田

道 車

連 座

和 0

K 中

治

0

to

病

氣 \$

な

E

告

か

n

金

0 人 詣

あ

時 5 0 け 妓

は Ł

情 \$

婦 忘

\$

t

0

無 部 您

П

亦 b

to

0

L

酌 b

4 る

花活け

7

あ

る 0 負

屋 L T

~ 3

主 VC 0 符

轉 1

げ 主 歸

込 n ^

4 る b n

初 頭 齒

女

年

を

連 3

れて金

0

なり

b

K

け

女

子

が

0 數

痛

む

10

だ

VC

な つち

よこち

よい

が

一等

-137 安

を

買

0 Ł

てく

姬 田 4 鋶

冬 貧 ち 待 t 0 乏 0 h た 月 を 0 0 間 カン 尼 包 でニ そ 僧 h 5 0 To 淮 カン Ł が 1 肩 水 0 n + テ ル で 尖 to 寢 吸 雪 b T U 込 L 景 た 去 ま る 色 U. n

天王寺のどやと

入

墨

を

湯

豆

腐

0

4

餉

~

母

が

來

T

<

n

る

デ

2

0

寒

さ

家

賃

は

5

な

思

Ch

世

見 世 た 自 慢 から 哀 西 n 村 な b 明

珠

立. あ 世 す なたなんだい 候 K そ 補 印 分 け あ き 0 0 0 あ 葉 演 h け 卷 た 說 る 喫 な 數 3 は h Ł 伦 \$ 25 2 0 が 有 考 軒 書 保 文 並 き U 證 る

100 1 1 VC 口 あ b 髪 を Ti. 寸 切 h

てる 時 間 \$ 步 n T 戀 を あ 力 L 力 ね

間 ろがあ 雜 兒 から b 起 無理 き な 2 な 5 Ł 7. 3 守 世 唄 流 て 3 行 る b

朝 田 新

水

由

大

鶴

喜

9 -

寢

見どと

話 甥 0 本 氣 送

b

朋 禮 輩 は 云 派 3 出 姉 K 藝 醉 者 CL

n る 力 爲 3 8 0 n 3

< 笑 酒 CL

133

本

雅

幽

IE.

1

<

华

0

T

師

恩

を

思

氣 月 寸. 働 今 移 養 何 冬 逢 齒 並び しろ 3 17 死 5 な 事 零 轉 0 7 が 16 ま 82 な き 0 0 星 移 で n カン あ 3. た + de 男 銳 を 働 て 轉 げ KE 10 4 が 梅 病 5 は る 3 H Ł 家 0 き Ł Ł 85 0 を 0 家 眉 感 る 言 輪 育 4 む 思 屋 情 か 3. \$ は 友 5 IC 0 根 3. た て 82 T 10 湯 Ł 狹 他 0 太 竹 彼 2 る 妻 K 低 水 カン 雫 5 聽 掛 Ł が 麦 兀 Z くし 内 b 谷 す 診 0 な な 布 0 n tc. 機 聲 德 b 器 b b 團 て き る る 鮎 見

女

時

計が

ある

n

ば

朝

は

to

0

L

いる

夢

0

5

5

大 遮

袈

裟

K

云

3.

月

給 走

0

不 越 舖

平す賣

カン

な

母

送

荷

造

b

繩

0

5

夜

か

な

斷

機

を

慌夢

T

1

り老

若

さ話える

信

條

8

な

<

る

美

船 霰 賑 結 7. 失 葉 4: 納 禮 卷 は か を L 今 to 5 を VC K 孕 な ____ 治 5 -ま 早 男 本 to h < 寶 Ł 5 6 等 C 0 0 8 L 0 癒 か 0 づ 旅 -111-1 Ł 便 簞 6 9 文 辭 b 0 腿 笥 0 5 ね K 沖 鏡 飲 ば 女 を VC は カン な 0 L 書 許 主 將 づ 5 廿 青 中 き n L す 棋 文 82 す to 澤 中 加 木 T 風 Ł

史

呂

ま 喜 à. 0 外 Ł 古 TI る 邪 5 き き 机 濁 春 秋 水 - 10 -

П

鼻

耳

あ す

b 4

カン n

to

病

中 床

病

松本地方米點下二十度

六分

財 H

政

は

頓

K 0

す K

石 驚

0

FT

結

婚

を 10 0 5 色

世に流

る 2

7

0

を

刷 拾

0

て

ゆ

<

眼

鏡

别

な 揷 V

7 \$

3

を

3.

0

か

儲け

たら

惚

れ

T

4

九

Ł

は

な

3

け

な

V

病

大

雪

話

其 な 號 當 守 16 瑶 座 10 か 力 日 大 < は 記 中 4 る 力 0 11. た 0 h 頁 \$ 5 び す な で K 4 步 \$ 8 0 1 な が す 銀 3 ぎ 之 狐

古

田

水

車

奈 良 井 柳 妓

0

人

き

0

5

き

6

C

な

勝

太

郎

瀆 報

眉 濃 L 人

合 は 石 L 曾 7 根 to

算

盤

K

F

111

1

調

を

嘘 病

7

來

7

\$ 編

木

オ

2

は 0

光

る

\$

0

床

K

詩

を

む

君

民 郎

> 思 成

CL

出

K

な

る

Ł

は

癪

な

抓

b

中

5 b

1)

行

き

K

任

世

Ł

云

3

は

他

人

な

る

八 百 金 萬 力 圓 ·C. 0 設 增 け 沓 VC た す 驛 n た IJ 客 1 が IJ な ゥ L 4

階 職 告 0 を が 誇 後 領 0 張 事 檢 L 館 杰 T Ł は 居 茶 る は 目 \$ 意 は 飲 外 H な ま b b

江 戶 4 す 0

眼 鏡 掛 け た 娘 ^ 废 數 な E \$ き 1

西 5 B

を

中 唄 此 叔 處 吟 父 CL \$ K 度 家 委 5 賃 程 L 0 て 氣 部 嫁 が 遲 捌 屋 け か n

藤 青 兒

後

踏 正直を 肅 昂 街 た 北 美 泣 T 切 然 選 風 人 < 路 K 0 ~ Ł VC で 2 悔 樹 4: 5 民 僕 北 \$ Ł 5 た が 政 0 を 0 無 0 ね 後 父 爲 5 ば 痛 裸 尿 目 0 5 VC VC な L 5 0 指 ち 弱 薄 女 5 さ T 中 Ł 姿 L 命 0 82 0 動 世 5 4 T ま h 袖 中 廣 10 石 植 平 カン が 運 な 消 た が 10 生 原 轉 崎 な る 山 あ 違 井 防 有 き 都 る T 手 車 b b CL 人 春 柳 儿 會 石 天 光 人 5 母 爪 2 秀 未 豆 金 と娘 を 亡 け 腐 S. 儲 + 好 切 す 屋 人 け Ł 0 る 切 力 煙 0 す 理 草 82 娘 あ 子 3 想 且 かい ~

損 2 小 靜 唄 を 坐 30 な 世 L == 7 3 V2 7 0 教 程 世 誇 ~ 度 界 足 且 VC 0 那 6 那 顏 終 保 な 0 \$ b 釋 5 利 出 な VC 指 5 ど 所 な を T 見 待 P 思 る b 世 0 N 噂

3 石

Ł

12

0

を を

> 知 が

3 覗

風 力

0

動

カン

82

鯉

0

け

づ 永 蔭

け

Ł

小 衝

金 動

貯

8

3

話

な 0 n

E 街 る

> で 供 h 手 錢 な 瘦 豆 を 店 娘 世 腐 見 が る を 世 を あ 7 積 冷 荒 0 商 2 月 b た た 3 井 力。 原 な が 火 英 5 b b b 鉢 宿 賀 夫 明

捐

幸

眞

田

過

ぎ

7

嫁 日

き

\$

< #

礼

新

見

間 晋 嫁

4

カニ

迫

1)

候補者 凡 岩 信 \$ 櫻 さまよへば變 な 唉 5 鄉 念 A 田 歸 T \$ 4 帶 0 Ł 死 0 君 情 時 \$ b D 主 82 額 0 5 借 義 る を よ か 6 入 5 枕 春 積 院 n \$ 家 約 82 る 屏 b 8 が \$ Ł 違 10 L C 5 風 D 日 萬 た 妓 VC 0 か C 本 KC 事 F た 春 整 撥 0 2 = 賴 尼 後 町 政 宫 1 宫 を 親 8 が を 办 4 治 E 藤 內 切 n 離 あ 田 IC V な 家 0 綠 だ 來 香 10 b カン る L き 耕 白 承 之

助

斷髪男裝奇骨の女傑

75

井

與

Ξ

郎

本莊幽蘭のタ

金 場 誓 得 寺 (電話南四八八六番) 音 時 三月十八日(水)夜六時半より

义

費三十錢

朗

川柳雜誌社

主

催

朗

春



篇研

本

秋

0

東 省

> 魚 屋

子

ò

7:

れ

1= 瀧

0

末

1=

膏

ば、膏薬を貼つたまへ、瀧にうたれて居る事とならう。 て手當をして置く、養生である。「うたれる瀧の末に」なら 秋の屋=瀧に打たれて膏薬を貼るとは、其意がどうも判 省ニー肩や背を瀧に、よくうたれた後で、膏薬を貼 (589)

明しない。「末」の字も「後」の意であらう敷。 のであらう。瀧壺から流れ出す、流れの末に見出されたと 云ふのだと思ふ。 魚 張つてあつた膏薬が、瀧にうたれてはがされた

(590) つまくつて歸 る 昔 0 しの び 道

= 昔は忍び逢ふ瀬を樂しむだ道を、今は珠數爪繰

即道哲の庵の邊の土手のことであらう。 つて歸へる。人生は常無しだ。 秋の屋=「しのび道」といふのは、 高尾の墓のある西方寺

東 魚=継が一轉して無常となる有様。

(591) 酸 1. * 0 並 3 小 梅 梅 若

なす。 が有つたと思ふ。 在り、木母寺の梅若は傳説に遺る。 秋の屋= 昔の小梅邊では、製して賣つたといふ。古川柳 省二一梅の字に關聯させた句。 角田川畔梅干を名産と 有名な庵崎は小梅村に

魚= 江戸砂子中の郷の頃に、「梅よ干瓜よと中之郷

など所々で干しならべてあつたらうと思はれる。見せ實で身をすぎる梅屋敷」などがあるから、此邊では梅梅屋敷の頃には、「去年見た花を茶で飲む梅屋敷」。「花は大騷ぎ」と云ふ其角の雨乞に關聯した句が擧げてある。尚

(592) 年明の心にしつ む 燈 籠 の 火

省 == 二十七思へば嘘のつきおさめ、の年明ともなれば、玉菊追善の燈籠の灯にも、しむみりと過ぎ越し方が思ば、玉菊追善の燈籠の灯にも、しむみりと過ぎ越し方が思

一人感慨にふけるのである。 和である、と苦界と雖十年の間住み馴れた、廓を出る身に 和である、と苦界と雖十年の間住み馴れた、廓を出る身に

東 魚= 追善とはいへ華かな燈籠の灯も、いつそ淋しく

(593) 拔身を軽く思ふ高縄

行く。
省 ニー 十四日拔身をしょつて夜道する、との大山納太

高繩へ出て、本當に旅へ一歩踏出した氣になる。

り高縄は動かぬ處であらう。納太刀も輕く勇ましく、肩にし行くと云ふ心持ちで、左

(594) 草の中にも傘は三

本

省 二 三本?なぜ三本か。

秋の屋= 名古屋山三郎の紋章は、三本傘であるが、同人

東 魚= 解らぬ。草家にしても、夫婦二人分と、まさか夫れを詠んだものである歟。

ふのか――秋翁のお説も面白く思はれる。

(595) 朝顔が咲と螢は馬鹿に成

省 二= 夏の夜のたのしみとなつた螢籠も、朝顏(秋)が

秋の屋= 螢の光が衰へたのを、馬鹿になりと云つたのであらうが、適切の言語ではない。

に光を失つた。即馬鹿になつたと詠んだものと思ふ。

(596) もはや男に成寄し後

年二年と經つて、今では男同様――後家さんの花喚く時省 二= 悪る堅い後家だ、などと噂されてゐるうちに、

代も、さう長くはない。

けるである。 秋の屋=花さく事もなかりしに、 身のなる果ぞ哀れなり

成寄るは如何にも適切である。 意で、成かくるでも此の場合の心持は、 てみると質にうまい言葉だと思つた。 魚=「成寄る」と云ふ言葉が變だと思つたが、よく考 ぴつたり出せない 成り近づくと云ふ

(597) 呂 敷 度 < 主 ŧ 取 違 U

込むで置き、何に氣づかず使用して居るうちに、不圖氣づ 秋の屋=昨日は源氏、 省二二 これはすまなんだ。 他所の風呂敷を、思ひ誤りから、 度々は少し大げさかもしれぬ。 今日は平家。 引出しに仕舞

から、 が山なのであらう。 魚 自他のを混同しやすい。風呂敷を擬人的に云つたの 風呂敷などは、得てぞんざいに扱はれるものだ

(598)膏藥 0 重 心 は 穴 ŧ 明

ため破れたのであらう。 省ニ= 膏薬が、ひッつき合つたのであらう。はなれぬ

秋の屋=「二重心」とは、少し曖昧な語 であ る。

二重心と云ふのは、はがさうとすると、 魚 解を得られない。腫物に穴が明いたと云ふの 中々引はがれぬ心 か

(599)干 鰯 0 仕 切 見 T * 醌 か 畳

省二二 ホシ カ肥料などは大量取引ゆる、その仕切も金

額が上る、 見て驚く有様。

秋の屋=「見ても」のもの字に難があ

る。

さてく金は難有、 さすれば、あれ程のカサの干鰯が金にすると僅かこれ ても、 魚 金の難有さが分つた、 銚子邊へやられた、 貴いものと云ふ心持ちであらう。 眼 ドラ息子が干鰯の仕切を見 が覺めたと云ふの であ 65

(600) 記 念 0 琴 1= な み 1= か

交

る。 省ニ=「かき交」は零を彈く事と、涙をこぼす 秋の屋一涙をかくといふ例は有る殿。 かたみの琴を彈じ、思ひ出のやるかたなき様。 事 VC

が交るのであらう。 魚=「かく」は琴をかき鳴らす方のかくで、それに涙

(601)五 月 雨 1= 肴 0 顔 ŧ 見 忠

忘れる程。 さへ面倒になる。 氣分にならぬのみか、 省 ニー 五月雨氣分は出て居る。欝陶しくて何にもする 肴屋も餘りやつてこない、肴の顏さへ見 腹の中まで腐るとも云はれ、食ふ事

15 し推敲が足らぬ。 秋の屋― Ŧi. 月雨の頃 には魚も捕れぬが、 「肴の額」とは

カ

ら流れ出た佛に感謝の心の表はれである。

「魚の額」と云ふ處に、 可笑さを誘はれる。

(602)六 無 理 ta 藝 呼

第なのではあるが、 れば無理な筈だ。 -「無理な藝」などは、 六疊敷の狭い座敷で、 前句 によりは 藝人を呼むだり つきりする次

秋の屋 萬歳にしても、 太神樂にしても。

(603)魚 藝呼ぶは少し言葉が苦し

蒸

息

老

吹

0

to

应

1=

成

たのが癖となったと云ふ丈け。 = 患部をむすため煮出す 力。 5 息を吹きつ ム用 N

秋の屋 興味索然たる句である。

魚 一瞬に成」に、求めれば味を求むべきである。

(604) 0 ō ちて 言 3 念 佛 が ほ 6 事

であるが)。 から 到らぬ。 心底から有り難い 省二二 (念佛にも色々の種類 人に聴こへ П のうちで心静 のである。 、よがし K VC 念佛 んがあ 唱 ふるの を唱 つて では、 概には言 て居る、 未だ信 その 82 心が

秋の屋= 魚 思はず知らず口のうちで唱へるので、本當の心 姑女の空念佛などは、 切 無功徳であらう。

> (605) 客 夜 着 1= 土 藏 0 鑑 き 0 t T 出

鎰の配合に面白さがある。 に行き、その上に大きな藏の鎰を上せて出てくる。 省 = 下五 せてい でしつ な 客 用の夜着を藏へ出し 夜着と

てゐるさまさへ想はれ 秋の屋上 魚 佳句である。 客夜具であるか る。 鑑をのせた處が、 ら、土蔵の鑑が能く利 少し中凹になつ てねる。

+ 月 0 靈 O ימ 5 る 本

(606)

かいつて、 秋の屋 = 親鸞忌の お取越か。 のどかなる有様の有り難く勿體なき事よ。 御 取 十月には小春日あり、 心越とい ふの は、 本願寺の末寺に於 本願寺に霞が

霞のかゝる、 て舉行するものだ。 長閑な光景を詠んだ句である。 十月は所謂小春で、 本願寺の大伽藍に

この句の良い處と思ふ。 魚 前説につきる。「十月の霞」とずばりと置い た處

句 案 内 潼發 送 慗 理

この際お手數作ら案内御希望の方は住所を左記 今度カード式人名簿を新調簽送の完備を期してゐますので へ御報らせ

市 句報 西成區鶴 見 光橋通 青 y 五. 木 [2] 史 呂

東 京 富 士 野 鞍 馬

> 朝 8 煙 草 減 そ か Ł 思 U

> > 4

る

元

殼 K 火 を 0 け T 見 る 男 0 子

吸

な V 人 を 大 學 探 L T 居

0 中 證 書 0 公 證 0

1 が 2 0 邊 K 建 0 途 が あ b

せでついて來る子 0 男 が ね が 5 5 to CL < 寄 な b b

新

世

帶

修

廊

旅

行

を

語

1)

合

ひ

寒

雀

大

送り

ま

世

5

が

引

0

力

7

る

非

常

線

泣

妹は

藝

者

10

5

た

L

ま

世

82

Ł

V

3.

肉

. 親

流

連

~

降

6

L

to

樣

K

雪

Ł

な

b

アパ

置

炬

燵

=

人

呼

h

で

T

度

1

L

S

ち

6

す

ば

癒

3

筈

な

b

君

が

疾

婚 禮

妬

5

7

る

る

0

\$

よ

ば

n

T

3

如

才

大

阪

長

谷

刑

奇蹟

な

き

限

b

は

Ł

博

1:

腕

を

組

3

年

男

裃

ま

C

Ł

娘

を

見

n

ば

下

を

向

き

葝

蒻

0

中

5

な

男

が

×

1

6

8

7

ス

1

會

葬

K

次

ぎ

は

君

だ

Ł

力。

6

か

は

n

喧

嘩

L

た

子.

0

後

3

L

10

寢

る

炬

燵

11

待

合

春

を

2

ぜ

ま

<

樽

を

す

來

る

人

を

蟲

が

L

6

世

る

樂

瓶

會

葬

者

院

主

0

巾

を

あ

け

3

7

n

金 澤 安 III 久 流 美

人 絹 0 炬 燵 蒲 團 K あ 2 が 冷 克

戀

愛

を

說

<

菊

池

寬

湯

が

嫌

CL

~

v

1

帽

あ

n

が

伜

0

趣

味

VC

合

U

雪 晴 九 K 決 0 た 仕 事 持 0 7 る す

が 器 用 K 出 來 T 都 會 C 4

乘

换

長 崎 柳

御

影

秀

當て

は

8

る

事

が

自

慢

0

伯

父

0

智

惠

0 中 IC 酒 Ł 云 3 \$ 0 際 を

見

せ

世

ス か יי 1 0 K 象 0 自 在 な る

E

2 视 詞 御 願 CL 申 す 事 ば カン b

オ

1 ブ ~ 女 _ 人 0 あ た b t 5

節分に豆まき男に選ば

を 0 け 腕

時 計

Ŧi. 健

松

Щ

前

田



JII 時 評 柳

高 機 關とは

あるから、勿論なんにも知つてゐないのであ たやらに僕にその内容を問合せて來たが、僕 れを見た東京の柳人は一様に驚きの聲をあげ く」の中に書いてあったことであるが、こ 河柳雨吉、 礼 東都柳界の最高機關として求眞倉が組織さ これは、「おもひで」二月集卷尾の「いろ 光、三浦太郎丸の諸氏であります。 ました。 ――僕の周圍の柳人は、申し合せ この文章を見て驚いた一人なので 額ぶれは西島○丸、川上三太郎 田中不倒人、前田雀郎、 古谷盈

> その會員の一人である川上三太郎氏に訊され かれたので、その事が車山君の疑問として、 る 所が、その折に丁度「生長會」(次項)が開

た。すると、三太郎氏の返事は、 「求眞會といふ會は、僕と前田君とで川柳 はなかつたので、前田君がせんりら社をつ ねんく言ひあつてゐながら、今迄は餘り逢 を携へて川柳の大成のために盡さら、 柳とはどらいふものか、を研究し、 ことを語りあふ會で、 どうすればいるか、と研究し、 會ではない。僕と前田君とは、僕は川柳を 別に何等意味のある 前田君は川 兩人手 とか 0

高 須 副

味

れは、 枚の原稿に整理されてゐる筈であるから) 手許には、當夜の會話がそのまく、 山川花戀坊君に問合せて見れば判る。 もりである。 ではないが、 が必ずしも、 で、此方の知つたことではない」 最高などといふ形容詞は、 勿論柳界の機關などでは全然ない。まして くつたのを機會に、これからは毎月一度づ い人は、當夜速記の方を擔任してゐられた 逢はうといふことにしただけのもので、 僕の聞いた意味の大略で、三太郎氏 この通りの言葉で言つたわけ しかし、本當のことを知りた 意味は少しも違ってゐないつ 使ふ人間の勝手 百數十 君

高、これに對しつは、當夜出席の東都柳人 の席には横濱の柳人も約半數ゐたので、この 三太郎氏の説明で、兎も角もその問題は打ち 三太郎氏の説明で、兎も角もその問題は打ち

併し、その求眞會なるものが東都柳界の機 闘として存在するならば、東都柳界にそれを 語るべきではなからうか。最高といふ形容詞 については、三太郎氏の言はれる通り、自分 については、三太郎氏の言はれる通り、自分 といへばそれまで、あるが、それがたど最高 といふのでなく、東都柳界の最高機關となる といふのでなく、東都柳界の最高機關となる

勿論、これは「機關」といふテクニックに がそれを知らないといへば、それまで \ あるがそれを知らないといへば、それまで \ あるが、まさか東都柳界の最高智嚢をもつて自任が、まさか東都柳界の最高智嚢をもつて自任が、まさか東都柳界の最高智嚢をもるの言葉をする前記の會員諸君が、それくらるの言葉をする前記の會員諸君が、それくらるの言葉を

て、共に行動する議案を審議すべきものであからには、東都柳界の現役に呼びかけて、ふからには、東都柳界の現役に呼びかけて、

企てたが、個々の感情または勢力争ひから、 ものがなかつた」めに、それさへ出來ずにあ りながら、東京柳界に今まで「機關」といふ 僕が過去に於て知つてゐる。また、每年一回 感情が多分に邪魔をして、纏らなかつ事實を やり吟社に名をなさしてしまふといふやうな のであるが、きやり吟社を中心に纏ると、き が、きやり吟社で随分骨を折つたことがある や、現在求眞會の會員の一人たる西島〇丸君 いつも不成功に終ってゐたのである。それに めに、東都柳界は今迄にも幾度か大同團結を ると考へる。――さらいふ「機關」を作るた る有様である。 柳界などは毎年率先して相談に應ずべきであ してゐる全國川柳家交驩會に對しても、東京 何處かで催して欲しいと、全國の柳人が希望 ついては今は大阪にある塚越正光君の迷亭君

だとしても、それならなほさら、その組織はだとしても、それならなほさら、その組織はがあるが、それが左翼ばりの地下機關(某所でたとひ、それが左翼ばりの地下機關(某所でたとひ、それが左翼ばりの地下機關(某所でたとひ、それが左翼ばりの地下機關(某所でたとしても、それならなほさら、その組織はだとしても、それならなほさら、その組織はだとしても、それならなほさら、その組織は

東京柳界の現役中に連結してゐるべきであつ 東京柳界の現役中に連結してゐるべきであっ ら、同社の竹田花川洞君を無視し、川柳研究 ら、同社の川上三太郎氏が會員でありながら、同社 の熊澤車山君等が全然關知しないなどといふ の熊澤車山君等が全然關知しないなどといふ

「閣議」といふのは、内閣で政策を審議するを設には、閣僚が五人集つても「閣議」とはいはないのである。こんなても「閣議」とはいはないのである。こんなても「閣議」とはいはないのである。こんなことを書くと、求眞會の諸君に笑はれるかもことを書くと、求眞會の諸君に笑はれるかもことを書くと、求眞會がたゞ眞を求める會だと發表されたのなら、東都柳界の最高集團として、僕等はたゞ敬意を表するのみであるが、それを等はたななら、東都柳界の最高集團として、僕等はたな敬意を表するのみであるが、それを等はたななら、東都柳界の最高集團として、僕等はたななら、東都柳界の最高集團として、一本、「関議」といふのであるが、それを等はたなら、東都柳界の最高集團として、一本、「関議」といふのであるが、それを等はたなら、東都柳界の最高集團として、一本、「関議」といるのであるが、それをでは、僕等は東都柳界の一點として、一本、「関議」といふのであるが、それを

生長會の事

蒲田に住む熊澤車山君と品川陣居君の手で

「生長會」といふものが創られ、その第一回は 「非定型川柳檢討の夕」として、昨年十月に催 されたが、その第二回が「川上三太郎氏に斬 込む夕」として、この二月十一日の夜開かれ

會する者、當の川上三太郎氏を中心として 橋鬼猿子、東京から小林平吉、田邊幻樹、清 橋鬼猿子、東京から小林平吉、田邊幻樹、清 橋鬼猿子、東京から小林平吉、田邊幻樹、清 様、幹事二人に速記の方を擔當された山川花 僕、幹事二人に速記の方を擔當された山川花 様、幹事二人と速記の方を擔當された山川花 様、幹事二人と速記の花戀坊君が、當夜三太郎氏 に斬込んだ者は、僕、米花君、山雨樓氏の順 で幹事二人と速記の花戀坊君が、當ひたい事 で幹事二人と遠記の花戀坊君が、當ひたい事 で幹事二人と遠記の花戀坊君が、當ひたい事 でのり思ふやらに發言されなかつたのは、遺 憾であつた。

それと、これは後で米花君や山雨樓氏とは話しあつた事であるが、最初から酒精分が出話しあつために、だん (議論がアルコール的になり、しまひには何も彼も否定するが如きになり、しまひには何も彼も否定するが如き 虚無的議論や、意義なき大言壯語の類が飛出したのは、會が會だけに非常に残念に思はれした。

からいふ事を書くと、これは僕が酒をたし

だと、僕はあへて主張するのである。
だと、僕はあへて主張するのであるが、どんな酒のみでも、酒を飲めば必ず醉ふ以上、眞面目のみでも、酒を飲めば必ず醉ふ以上、眞面目のみでも、酒のみに對して同情がないのだと

第一回の時には、會を一度きりあげてから酒の席を設けたので、議論は前後二つに分れたけれども、ねの何方にも各々内容があった。所が、この第二回の會では、當番車山君た。所が、この第二回の會では、當番車山君た。所が、この第二回の會では、當番車山君が三太郎氏をいたはる氣持からである事は、が三太郎氏をいたはる氣持からである事は、が三太郎氏をいたはる氣持からである事は、が三太郎氏をといふものが感じまつて、殆んど纒つた内容といふものが感じらそれなかつたのは、來會者大半の心惜しく思はれた事と思ふ。

作し、僕にとつては、この一夕は非常に有 君及び御來會の諸賢に、深く感謝するもので ある。殊に、中心たる川上三太郎氏には「斬 込む」といふ言葉から來る心理から、思はず 込む」といふ言葉から來る心理から、思はず がらず殆んど暴言に近いやうな强い言葉を、 まゝ使用した事を思ひ出し、僕はいま心から まゝ使用した事を思ひ出し、僕はいま心から まゝ使用した事を思ひ出し、僕はいま心から

> はわざとこゝにそれを詳述紹介する事を避け はわざとこゝにそれを詳述紹介する事を避け たのであるが、出席者各人の記憶に殘された その斷片は、後日いろ (の形式で、各所で き僕ばかりに有益な會であつたわけではある まい。幹事兩君よ、僕のこの潔癖すぎる非難 の如きに辟易する事なく、「生長會」の今後

二月の句會二つ

っと思ひ設けぬことであつた。 月に、特殊な川柳會が三もあらうとは、ちよ もう書きすぎるほど書いたが、二月のやうな ものと思ひ設けぬことであつた。

特に限定してゐる會であるから別問題としてであり、その二は十九日に催された荒川吟社窓歌吟社合同句會であり、その三は川柳研究窓歌吟社合同句會であり、その三は川柳研究を歌吟社合同句會であり、その三は川柳研究

のは、面白い會であつた。――元來、荒川吟十九日の荒川吟社、窓歌吟社合同句莚といふ

によつて組織された會で、まだ機關誌も持つ てゐないので、 といふのは、 最初は「荒川の夕」と稱して、 東京市荒川區に在住する柳人

特殊な來會者があるものであるが、その特殊 か

萩君等の顔の見えたのも嬉 常に主張する通り、特殊の句會には必ず しかつた。

僕 やう、僕の心から希望するところである。 君 次に、二十六日の淨玻璃俱樂部といふのは は この會から東京柳會の客となられる

績は、 坂表町警察署の高等係主任である 川柳研究社の幹事であり、 の位置及び業績と質によく似てあ 1: る 0 僕等にはちよつと羨しい位で、 趣味とを併立させてゐる御手際は とコハイみたいな會ではないか ふのも成程とうなづけて、 ループだといふことであるが、さ 込神樂坂警察署在任者ばかりのグ 植木鬼佛君がリードしてゐる同牛 に「警察川柳集」といふものを編 研究」に於ける君の位置及び業 述の淨玻璃俱樂部も多分こんど が、 併し、鬼佛君が御自分の職業と 聞けばその名の「淨玻璃」とい 今また「川柳研究」誌上に「昔 回目の句會と思ふ。 本誌に於ける福田山雨樓氏 部内へも極力宣傳されて、 の研究を強表されついあ | | | | | | | ちよつ 東京赤 0

成を希つてゐる者であることをこの際鬼佛君 僕は、常に君の運動に注意し、 尊敬してゐる川柳家中の る。そして、その御雨人とも僕の 人格者で その大

麻生路郎 編著 四六版一六〇頁・兩人・浜然三十二変 柴 舟 漫 圓 壹 價 定 **錢拾八價特** 錢 六 費 送

出玉區成西市阪大

地六三目丁三通本

ある。

所が、窓歌吟社は最初から

「草詩」と連絡があり、

その同人

も呼ぶやうになつてしまつた會 しに荒川吟社と人も呼び、 てゐたのであったが、いっとはな 極くプライヴェイトな句會を催し

自分達

01.であるとは著者の序文の一節である。 、噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵のに柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつも 編纂·路郎序

遊り

びで川

特殊な會で、成立的には全然別箇 はすべて芝居の御囃子連中といふ

ものであつたのであるが、

窓歌

荒川區に

阪大川柳會 11 柳 六

圓壹價頒

錢六費送

所 行 發

會は密接な關係となり、 居住してゐる所から、この二つ 吟社の同人の幾人かが、

遂に今回

のやうな合同大句會を催すことに

なつたものであらう。

九三〇三阪大替

あられたのは、 あつたさうで、僕などの知らない 聞けば、來會者は百二十餘人で 知らなかつた名の柳人の大分 類もしかつた。 特 殘特木で大

醉月君、 に、直ぐ歸つてしまはれたが、 生の見えられのは珍しく、 三越川柳會の尾山兎耳君、 川柳倶樂部の倉田 岡田二 村澤小 一面子先 な來會者を、 なければ、

るのであるから、どうかこの會に出席された その特殊な句會は無意義な會にな 般川柳會の客にまでしをふせ

あ

るの

に申上げておきたい。

23

船量も 明 は 鳴 鳴

門 門

Ł 0

聞 渦

5 1

T 來

出 T

3 途

甲 -[3]

板 n

舟

夫賀英 れら知を名に別はと渦衛兵郎十

五

鳴

門

[ii] 大 樓

味噌汁 大鳴門小 巡 醴 0 かい 餘 辛 德 6 1 鳴 6

門 鳴 ボ 0 Fif 飛 渦 0 h を 朝 6

賞 1 0 渦 る 的

曉 水 同 童 客

前 田 五 健 選 並 畵

名

四國の 柳 卷

寫眞 鳴門 要 洒 潮 滿 流 鳴 海 大 乘 七 2 名 か 1) 20 PI 光 3 浦 鳴 塞 物 月 1 き 鳴 で 20 カン かと身も PH FF を は 渦 は カン 0 0 22 0 渦 鳴門 デ 温 膽 鳴 は 翠 鳴 通 6 鳴門 检 だ ス 門 寒 世 針 [19] b が を 主 0 鳴 0 0 盤 渦 太 鷗 力 0 82 0 FII 船 10 漮 渦 力工 IC 底 ぎ 平 0 6 渦 濟 3 7 だ は 内 Ł は 洋 が た ス Ł 5 + 胆 見 3 見 0 だ 亂 思 狂 6 1 ~ 0 力。 b VC 思 大 大 Ł 3. 77 春 大 L \$ 1 20 1 82 裸 な 召 0 鳴 拔 鳴 た 鳴 0 な b 3 H 島 門 ば F 7. 17 FF b b 世 海 12 る 4 木 虻 葉 晴 素 ri 靈 禿 th n 4 文 0 鍮 履 光 應 泉 7. Ш 紫 鐘 庫

名所

だの

所 E 名 本

(四)(三)

清島

水

切

一月二十

氏

京

都

0

卷

者

紫

氏

原 寺

> メ切 選

月 山

= 111

+ 五.

日明

(九)(八) 川 先本 阿珊四 瑚國 社 波 0 柳 . 事 鰹 卷 務 節 踊 所 女 用 選者 切 切 紙 四 ガ 前 3 キに限 月二十 月 田 二十 五.

H 日 健 H

る

大 ス バ 渦 ラ 1 2 1 双 渦 眼 0 鏡 1] 0 ズ 度 4 を Ł あ SI は 波 踊 世

世

Ŧī.

健 晋

0 概

0 鳴門 鳴 King 波 0 鴫 門、 略 茶 園 0 眺望

淡路

\$

3 に集

々雷の語

の辞ける

る感

あ 0

> 東 124 馬

を 凄

小

西 號

染を打 E

0

H

[11]

0

奔怒

景

かを一

眸

8

3

大

島、

孫崎

裸

中

飛鳥、 鳴門全

は

縣

盤 大鳴門、

温渦輪

渦 見

凹陷 の蕩

旋入

八流、

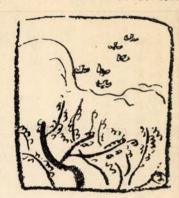
周

邊

隆 1)

起、

且つ愉快 鳴 狂 潮



視野は廣く

川柳指導講座 「女性」選評と添削―

光

「女性とは何ぞや?」となんて質問をしたらで女性とは何ぞや?」となんて質問をしたらのことさ」とあつさり片附ける位で、氣の荒いのなら「馬鹿にするな」と参骨で鼻面を……おつと失體、そんな野蠻な真似はもう半世紀おつと失禮、そんな野蠻な真似はもう半世紀おっと大禮、不見岐の雨先輩に確立された頃柳が劍花坊、久良岐の雨先輩に確立された頃がらはなくなつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だつた私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だった私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だった私は、英文法の時間に「犬の頃中學生だった私は、英文法の時間に「犬の頃」とないと言いた。

は「婦人」とか「婦女子」とか稱ぶ場合に「女性」といふ言葉は英語が學問として日か。 ではあるまいかと思ふが、これはその方の専ではあるまいかと思ふが、これはその方の専ではあるまいかと思ふが、これはその方の専門家の研究として「女性」といふ言葉が一般門家の研究として「女性」といふ言葉が一般によなうでぢよせいではない、そこで英文學渡來せうでぢよせいではない、そこで英文學渡來せうでぢよせいではない、そこで英文學渡來せうでぢよせいではない、そこで英文學渡來せうでぢよせいではない、そこで英文學渡來は後ではなからうかと大ざつばに言つて見た。 に「婦人」とか「婦女子」とか稱ぶ場合に「女性」といふ文字は散見するが、いづれもによせいではない、そこで英文學渡來は「婦人」とか「婦女子」とか稱ぶ場合に「女性」だが現代語として

性」と稱んでゐるが「女性」よりたしかに潑性」と稱んでゐるが「女性」よりたしかに潑地が感じられるのは、私達が耳馴れたからでもあらうと思ふ、そして何となくインテリでもあらうと思ふ、そして何となくインテリルのも、現代人が好んでさう稱ぶ魅力なのかも知れない。

はなかつたこと、安心してゐる。 性をして身の置處をなからしめるやうなこと

作家諸君は何んな女性を凝視たらうか、 句一句を丹念に検討してみよう。 あだしごとは扨措いてこの川柳指導講座の

妹も女性 であったたいこ 帯

略したのであらうが、ちよつと無理な創造語 こ帶」とは「お太鼓に結んだ帶」のことを省 ればならない。所でこの句の用語だが「たい が、段階としてはそこまで行つて貰らはなけ 考へさせることは本欄の作家には無理である 出るのにもそれが意識されるといふ點にまで きを詠ったのである、それ以來一所に散步に のを見て、妹が女性であることを意識した驚 あらう……帶をきちんとお太鼓に結んである と言はなければならない、そこで先輩……二 るる妹が……恐らくは制服を着てゐたのでも 太郎氏……の創造した用語を借りて 毎日朝から晩まで一つ屋根の下で暮らして

も女性と知つた赤い

帶

か腹合せ帶晝夜帶とか名古屋帶とかの名詞を これで年頃もはつきりすると思ふ。丸帶と

> どは結び方で、それへ帶と例へばたいこ帶の 使ふにはそれでなければ生きない句材をしつ から注意すべきである(句主島根縣達三君) やうにつけることは物を知らないと言はれる かけ其他美容師の考案する勅題に因む名稱な て貰ひたい。それからお太鼓、貝の口、引つ かり摑むことが肝要であることも知つて置い

男性に近 い女性 の多いこと

れてこそである、出來れば男性に近い女性が で作家に詠み直しをするめる譯である。 理かも知れない、そこで私も敢て添削しない とさへ思ふが、そこまでは出直さなければ無 外見的にか内容的にかをもはつきりさせたい 面白いとか、褒めるとか、貶すとか何かゞ表 は言へない。例へばそれが低かはしいとか、 の川柳眼を通してなければ川柳されてゐると 批判的精神とか思想とかである。それが作家 變哲もない。そこに必要とするものは作家の が目につくからといってそれだけでは、何の である。だが如何にこの句のやうな社會事象 によってその使命を効果的にしようといふの こそ本誌が他の柳誌に魁けて有保證新聞紙法 俗を諷刺するのもその領域である、であれば 川柳が社會へ批評の眼を向け、或は時代風 句

主島根縣さわだ君

非常時に生れ國 防 婦 人

恨むらくはなり止の粗雑さをもう一度推敲し 矢鱈に見せられる大阪の作家だと思ふ。たい がい」と言へる。流石にあのエプロン白響を 巷に氾濫する、そこを摑まへたこの作家は頭 しない、それほど國防婦人會は何ぞと言へば するものでないといふ考へ方は現代では通 て貰ひたかつた。 エプロン姿で街へ出たり、電車へ乗つたり な IJ

非常時に生 n 或 防 婦 人

そつとして置から。(句主北區春巢君 なると作家の意思が消えて仕舞ひさらなので 避けた揚句がなり止めになつたのかも知れな では女性そのものでなくなると思つてそれ ることになる、或は作家もさう考へたがそれ としたがけでも、その意味で一歩前進してあ い、慾を言へば生れも何とかしたいが、さう

出戻りの姉臨 月に慮所無く

らしても判らない、といふのは處所無くが何 まづ作家に句意を説明して貰はう。 しやつぼを脱いで数へを乞ふより術がない、 と躓んでいくのかわからないのである。私は この句に向つて私は小一時間も考へたが (句主浪 何

母性愛女性は强し亦弱

L

無露映書時代のタイトルを見るような感じ を與へるのは、私達の心へ訴へる母性愛なる 文字があるからである、だが何故この作家は 文字があるからである。だが何故この作家は 見方だと誤認してゐるのであらうか、この 的見方だと誤認してゐるのであらうか、この 的見方だと誤認してゐるのであらうか、この 的見方だと誤認してゐるのであらうか、この はどに詠つて貰つた方がもつと私達に强く迫 でたことであらう。例へば

世性愛女性は强し後家を立て

ぎない。(句主奈良縣青柿君)
古い用語だが强さは强調出來る、然しこれで

僕君と云っても移り密は女

男装の何處かに女氣を殘し

は別である。(句主松江市笑鬼君)

女性には一チ目を置く男な

1)

女達の自惚强さはいちもく置かせることに誇く座談會などで高言してゐるが、實際では彼聴明な女性は斯ういふ男性を輕蔑するとよ

(句主高松市柳夢君) (句主高松市柳夢君)

只女子と生れたばかりにあなどられ

これは女性の詠葉である、署名を見るとこの作家は女性なのでは、あと一應は首肯けたの作家は女性なのでは、あと一應は首肯けたが、果して女性は侮られるだけであらうか、が、果して女性は侮られる女性もある筈である女性自らが侮られることを詠はずに、同性の女性自らが侮られることを詠はずに、同性のちない」といふ葉息は聞き倦きてゐるのだからせめて川柳を作る女性からでも「女性として生れた喜び」を傳へて貰つて、人生を明るく動かにしたいものである。

ただ女子と生れしのみを侮られ

田町ねん子君) 文字の使ひ方其他に注意されたい。(句主池

或時は女性側の意気が勝ち

仁川府奇文君)

批判的觀點も調子もとくのつてはゐるが、

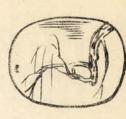
(句主天王寺區葉光君) (句主天王寺區葉光君)

0

さて集句を見了つてみると僅十句の中二句さて集句を見了つてみると僅十句の中二句さて集句を記が許さないので、判らないものは判らないと言つて句意を知らせて貰ひたいと思つてゐる、といふのは作家諸君の意志を尊重して添削するものは添削したいからで、私の句にするのなら譯はないが、それでは意義をなさないと思ふからである。

贈に詠つて見ることを心がけられたい。 贈であらうと、もつと眼界を廣く、そして大 題であらうと、もつと眼界を廣く、そして大 説な氣がした、見聞が狭いのか?課題に縛ら 談な氣がした、見聞が狭いのか?課題に縛ら 談な気がした、見聞が狭いのか?課題に縛ら 談な気がした、見聞が狭いのか?課題に縛ら

ることも決して無駄にはならない筈である。ことに氣付くに相違ない、それ等を味つてみ輩諸君はいろ~~な角度から女性を觀てゐる輩が一般がある。



店 飛 蚌

平 春

光

隅 まるとあるので、 から車を拾ひ(拾ふといっても相手は電車 日 ポスターが目についた。よく見ると今直ぐ始 邊橋で乗換へる途端、朝日會館の入口に、 から拾はれて) 曜の朝おそい食事を濟ました僕は、 英國先帝の御葬儀映畵上映」と認められた デ の會場に登り、 腰をおろした。 ートに落ちてゐる川柳を拾ふために、 まづ阪急百貨店を訪ふべく渡 萠 これは思はぬ儲けものと四 然襟を正して觀覽席の 夕風橋 だ 1 V

死別 柩を載せた砲車の直後に御徒歩遊ばされる 等しく人間である以上、 喪を掲ぐパッキンガム宮霧深し 悲しみを遁れることは出來ない。ウエ ンスター寺院目指してしめやかに軋 高貴の人々も肉親 む で

明朗と快濶の代名詞のやうにうたはれたプリ 新帝の悲痛に歪むかんばせは、これが嘗ては てゆくのである。 を階下から放さない。 刻なマスクである。 ンスオブウエールス殿下かと疑はれるほど深 しかもカメラはその焦點 どこまでも御姿に随い

まことに畏れ多いことであ あらうに、この撮影だけでは満足せず、ニュ 熈ぞうるさいやつと心中思つてゐられ からとて御政務室に撮影機の ス班は更に御即位の御宣言をトーキーした 新帝へカメラは

無理を申し上げ 砲列を敷く。 たで

阪

阪 のさばつてゐるために、二階の東西は連絡 急は 階 赤 1 ルの天井 が、二 一階の中 央ま

> 店の名にふさはしいものとならう。 を て馬蹄形となり、 増築中の北側が完成した曉は更に長さがふえ ともと電車との共同生活であるから賣場が帶 以上になってやくゆったりする。 絶た やらに長くてしかも腕曲してゐるため十合 やうに割然としてゐない。 れんばかりでまことに窮屈だが、三 いよいよ半球 (阪急) その上いま

横溢してゐる。 店内を游戈してゐる客の服装が平常着の多い 商品がいぢられるのである。 らず、從つていかにも庶民的で氣輕な氣分が を凝らした諸嬢、諸夫人の姿が殆んど見あた ことである。 だが、 流石に郊外電車の終點だけあ こゝでは所謂見せんが爲の装ひ つまり何も買は んでも平気で してい

4 襟部のぞくマントは女連 te

Ξ

うどんを献立表に加 して成程と思つた。 になって來たと人の職に聞いては居たが、 ゐた僕は、 なかなか乙な味である。 ふ七階の食堂の献立ケースでそば 北 船 場の大老舗、三越百貨店も近來大衆向 更にその下を行くもの、 試みに八錢の散財をする へたことに興味を覺えて 頃日大丸が、 かけを發見 しかもそ かやく け

た。見せつけられたやうな氣がしてあわれを感じ見せつけられたやうな氣がしてあわれを感じた。

しかも、こへの食堂からは窓をとほして指いる景色をみられて、お茶を呑んで、おそばをよばれて、ありがたうございますと送られて金八錢也では何だか濟まぬやうな氣がしてならなかつた。

虫を聴くこ」は三越バルコニ

長堀高島屋

展に押されて店内へ僕と一緒に轉がり込んだ六十がらみの老人が、いきなり「てんで人だ六十がらみの老人が、いきなり「てんで人だっとらんな。この分ぢややがて白木屋がはいつとらんな。この分ぢややがて白木屋の二の舞や」と獨語して傍にゐた女店員を苦めた。

出たところすぐケースがあつて胸を突きさら出たところすぐケースがあつて胸を突きさられたところすぐケースがあつなりが重苦しい。むたろ森厳といひたい位である。それに店内へとろ森厳といひたい位である。それに店内へとる感じがする、中へはいれば天井は燻んであるし、四階、五階などエレベーターをんであるし、四階、五階などエレベーターをおき込むところすぐケースがあつて胸を突きさら出たところすぐケースがあつて胸を突きさら出たところすぐケースがあつて胸を突きさら

一と昔前、堺筋の兩大關として北の三越とはかとなく陰影が宿つて、さむ氣がする。である。エレベーター裏の階段のあたりそこ

ある。 ろ店員の頭ばかり、立止つて商品を觸つてゐ 縮められた上に、昨秋の地下鐵開通によつて \$ やうな恐怖に襲はれる。 るとあたりの瞳がすつかり僕に集まつてゐる あまりに投げやりな致方である。 地 共に全大阪の客足を集中したグレート高鳥屋 パー 理的に致命傷を受けた。とはいへこれでは 開催中の「大阪新刀に關する展覧會」で 引續き新裝される他の店に漸次繩張りを と昔前、堺筋の兩大關として北の三越と トら しい賑はひを漂はせてゐるのみで わづかに第六階だけ 見渡すとこ

履物の音も疎らに閉な店

一體こゝの企畵部に人はゐないのであらうか、それとも「私とこは外商部で儲けて居りますし、それに店賣の方は南海高島屋に任せますし、それに店賣の方は南海高島屋に任せますし、それまでだが、それではあまりに策のないことだと思はれる。

一新そごう

とんなに違ふかと驚くほどである。 はでするに到ると、同じデバート

7

\$

を游いでゐる樣も、 端唄まじりで山ほど積まれた酒棒、 一葉き酒をしすぎた紳士、非紳士が赫い顔して さは七階で開催中の酪酸品展覽會にも溢れて に遺憾なく、 にまで草花模様を鏤めてゐる。 は梅と燈籠をあしらひ、 ウインドーの人形配置の妙、ホール 新そごう意表に出でく頷かれ しみなく使つた大理石の豪華版、 清新の氣が漲りおらが春の賑か 興を添えて愉快である。 エレベー 各階とも ター の中 瓶 ショー 0 ドア

大 丸

道路一つ越せば大丸である。一階エレベーターに近い天井と柱の間接照明は一瞬異國情なってゐる。プライスカードに注意すると端採つてゐる。プライスカードに注意すると端採つてゐるのがあるのに氣付く。いつか養のついてゐるのがあるのに氣付く。いつか

大袈裟な展覧會もこの意味に於てかあまり大袈裟な展覧會もこの意味に於てかあまり

「桃山時代から江戸時代に亘つて身は洛北

を看取することが出來たの た染織品の數 品を世に 鑿栽にあらゆる藝術の三昧に入って獨自の作 き僕にも、 K 送つた本 その 々」 とあるc 華 その 阿彌光悅 麗のなかに風韻ある畵趣 風雅 の作 給畵を解すること さては茶儀刀剣の な優游自適 H より 考案し 0

よれば、 Ш 來る。 なものださらである。 水 しかしこれは東京 火災の時は煙突の役目をつ 1 16 からは 屋上の窓をのぞむことが の白 だが 木屋 ことめ の經 艦験に る

潰すやうなことも ゐるといかにも宏大な感じがして氣持が 火災に危險だからといつてまさかこれ ルから七階を見る口をあけ あ るまいり を

つて休憩することにする。 ヤリアピンの聲なら聽かずばなるまい。 さてまだ南海高島 からは のレコードを だいぶ身體も疲れてきた。 森永キャンデーストアに ングを 御無沙汰勝ちで 僕は二日に 40 つたも 聴く會」 屋 と松坂 0 -0 度はこ」 あ が 心瘡橋筋を南 開か 3 屋 あ るの とゝらで打 が 礼 残つてゐる さで、 てる 時 世 ヤリ も時、 を持 Ш

> る 2 专 のはこの数日間 残念ながら時と金が許さな 中央公會堂に現はれ

てね

ど聽 がで、 ドウノフ」の二幕目 のバス獨唱、 精神はわかる」といったさらだが、なる 彼の第一 いてゐる方まで息が詰 び込むといきなり 夜を聽いて「歌の言葉は解らぬ この間死んだ松田文相が日比谷 (あゝ息が詰りさうだ) 響く「歌劇 まりさらだっ ボリス・ ほ =

を腰をかべめるやうにくどる彼の に現はれた日、 月 0 中ば、 梅田假驛の低い?トタン屋根 3 ヤリアピンがはじめて大阪 尨大な體

たの

はすまいかと思つたほどであ 軀だ。武藏山と相撲をとつても彼 視て僕は驚いた。長軀と云はんより しろ が

く兎の毛 ま圓盤から流れてゐる「蚤の歌」には恐ら 裳が搖れるといふ話 彼が獨唱會で咆哮するとき、 もそよぎはすまいっ であるが、 觀客席 その反對に の淑

0

心しながら、 名人の藝てえらいもんやなあと必みん 僕はコ、 アの香りを樂んで 感

3 ヤリ 7 ٣ 2 才 1 × 0) 首 7 フラ卷く

つ讀んでも面白 JII 柳 句 集



四六版美 自 畵 賛 豪 入

御恩鞍 一の馬 で年 まあの すり あ まゆ 人 生 劃 期 -JII

吹聽 御聲援を願 行 所京 ひます 丸 0 富內 士世 野四

馬

尙

知

人

御

柳 謝 Œ 價



水 谷

夢を見る蜥蜴よ俺 は 勞働者 三宵路

生命をあたへたのが句主の心の燈だとおもへ **匍ふてゐる蜥蜴なれば嗤へるでせら、妖靈に** と現在のかくてーるを詠つたものです。今も ぬ、まぼろしの世界です。むしろ作者の過去 それは決して悪を表粧するものではありませ でした、俺!と強く言ひきつた、ばつと級の ものがうごいてくるのでせられ。それは蜥蜴 いろんな慾望の化身が蜥蜴となったのです。 瞬の科學光線を加ふれば、凝起した妖美の 海の果てまでのびてゆく虹、いまこの虹に

出さぬ氣で子の名にしてる貯金帳 笑朗

オン書が描けだすころの父の心理、ともすれ くる健康句である。小生もこの感じを實行し つ」あるひとりなのです。童心にうつるカレ 父の影、子の影のあたろかさがおもはれて

> のてがたさを頂くのです。 がなければ實感句とは言へないでせら、手法 がよく詠へてあるのです、おそらくこの上五 のもつ善きものでなければ成りませぬ。上五 ば母の姿もうかんできて、歩一歩をゆく人生

忠實な部下と云はれてから弱し 徳

ですね。 をキャッチしてゐる妙は、作者の佳いところ どく感ずる。凡常の域にありながらよく鈍急 も眞人間となりきりたる態の弱く柳味をする れて一摑千金に醉ひし半生に比してあまりに 詩を織りゆく勝利者たらざる者の姿のおもは 齢老ひし人の姿動をまざくくと見る人生哀

アパートへ母の手紙の長いこと 品

今もくりかへされてゐることでせら。都會響 も縁遠いものですね、こうした情景はたつた 老ひたる母とアパートなるものはあまりに

鮎 美

> かげんによき精算をして賢婦たる可きです。 アパートもおもしろきかぎなのですが、いく ねば成りませんね、若き母となるおもひ出の やホネムーンから醒めて良妻賢母とならなけ のはいひーるもミスニッポンである以上必ず

水戸黄門の一國女となる勿れです、女性美の

詩型を採る。 人間の忘れてゐた る 水 0 味

ることのられしき。水を味を句主を貴ぶ。 の水にうつる味水のおほいさに雲わきて詠 せれば髑髏にかへるなつかしみのある句一滴 すね、溶けざるはなく溶けゆくものは浮水と あるときでした、いのちは水に還へるもので なりて萬象不滅にめぐるものです。想ひをは ふとはかなきは水を味ふおりです。ひとり

くだものと果物の調理

平 野屋 果 物店

物專 1 ラ 賣 部 部 戎 電話南 五七九七 波

果 13

さすが大阪

小 111

繪 武

文

る。まづ「菊正」でおみき少々。 麻生主幹にお供して今宵は南へまかり出 大阪も近年になき寒さである。

ートルを學げる。 酔ふ程に談論風發、饒舌とみにメ 三人が醉へば三人らしくなり

サスキーを一杯o 醉つて二次會は近所の喫茶店でウ 「これからキャバレーに案内し 壁間の名句も今夜は二人らしく

そうし して未だキャバレーなるもの知ら 小生、お恥しき限り大阪に移住

醉步を千日前に運ぶっ

ず。よきチャンスなりと大に賛成 今宵のマルタマは節分の假裝にてものし

しき花嫁姿の女給クン等右往左往。

「××さん(特に名を秘す)ーおなざし」 る。(だからキャバレーなんかヤンナッチャ サービス嬢もチャツカリ、ソーダ水をかすめ

「仲々ベッピンですね」 かへた感。

路郎師もつげらサービス嬢と意 氣投合の如し。 嗚呼! ヤンナッチャ 舞臺に氣を取られてゐる間、

名をすて、十七八の戀もせむ し、いやさ?

行末はどうあらうとも火の如

||南の一夜||

生々々と大いにタカる。アッシスタントなる

主幹を取卷きてA嬢、B嬢、C嬢等、ねエ先

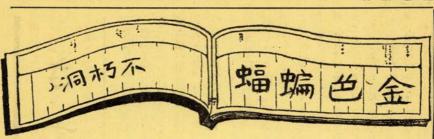
啊々!!

き。君千代と申すピカー女優の

やがて待望のボードビルの幕間

踊り「春駒」を観る。

舞臺少々狭ければ少々鼻につ



つた譯であるが、

起した。いよく 本號から、さらな セーションを捲き と、到る處でセン ることを競表する 新聞紙法で刊行す 本誌が有保證の

時代が現出しさう 競する。川柳時事 二・二六事件は勃 総選舉はある、 議會は解散する、 この時にあたつて 200

熟だつた。同時に 原稿の氾濫だつた 人々の躍進的作句 つたのは川柳塔の

だっただられしか

誌」をひろげて見てゐたが「お母ちやん、貧 を走らせてゐると、二男のアートが「川柳雜

乏川柳をつくりよる、 貯金國又引汐となりはじめ

悲しいやうな氣がする。 り、句の體をなしてゐると嬉れしいやうな、 出まかせに句をつくる。それが正論であった しないのに時々、川柳の批評もやれば口から アハ・、、」と笑らう。蛙の子は蛙で教へも

うけとると早速、 魚君、句會で私の選の天位に拔け、カップを 痔が悪くて酒を一寸ひかえてゐるといふ東

を手にした。こゝらが飲仲間のうれしいとこ と駄句り、會が済むのを待ちかれたやうに盃 路郎賞寝た子を起すものをくれ

寝床で、僕がペン た濤明君からのたより。 字が殖え、歐州氣分の薄くなったことが如何 備はよいことながら露人が減り街頭に日本文 日とは雲泥の違ひです、人口の滑加、街の整 にも淋しい感じがします」とハルピンへ行つ 「先年貴下がこの地に來られたハルビンと今

> を喪った。告別式で私は 病队中の亂耽君が芳紀正に二十四歳の愛妻

したことを想起し、涙を新にしたからであつ ず、面會謝絕の貼紙をして二階でひとり病臥 日悔みに行った時、納棺された君の死額に接 してゐた。逝ける人よりも残された人のいた の弔句を郁子さんの靈前に献じた。その前 ましさを感じた。 死してなほ博多人形の美をそなへ

の太い柳路村とその愛妻松代さんが思はれる す」と柳路君が北京から頼りをくれた。神経 境吟社の人々とも會ひ錦縣より歸熱いたしま 日天津に寄り和田默然人君に會つて山海關國 「北支進出の爲め北京へ視察に參りました明

るやうに猛烈な神鳴が鳴り響いた。開票の賃 ソレでも買票におさく一意りなかったと見え の嫌いな私は既成政治家とならずに新らしい 日本人の多いのにあいそをつかしてゐる。嘘 ッ最中には天意を示すやらに激震があった。 て、次から次へと違反が續出した。度し難い 撤正選擧がはじまった日に、違反を警告す 緑雨君のとこなどは棚のものなどが落ちた

治の進軍ラッパを吹いて。 出物家となったことをハッキリと知った。 味がなり、

大阪の地震は次のやう有な様だった。

始末などをしてゐた。 トほどに感じなかったらしい。それでも火の とだった。濟んでしまへば何んでもないが、 段の途中から轉落して表へ逃げ出したとのこ 出したとのことだった。その隣室の妻君は階 た。あとで聞けばドアが開かぬので窓から脱 音がした。尤もこれ等の事が殆んど同時だつ けて」といふ聲が耳に這入った。ドアを叩く 出來なかつた。隣室の若い妻君の「助けて助 ことが頭にひらめいたが、どうすることも らであった。さらしてゐる間も自宅の妻子の の隙間を見つけそこから遁れようと思ったか 央に立膝で隙を窺ってゐた。倒れる時に少し ので、私はアートを横抱きにして、部屋の中 一階の奥の端にゐた。いよくやられさうな 時は大變な騒ぎだった。自宅の方はアパー 私とアートは安普請の三階建のアバートの

らしい。白峯君のところは震源地に尤も近いらしい。白峯君のところは震源地に尤もが水柱原だけに、妻君の公子さんと、こどもが水

意に代へてこれだけの報告を書くことにしたあちこもから見舞狀をいただいたので、謝

信州の××君からの頼りの中に、「信州毎日に花××樹氏の川柳壇がありますが父が云ふようにくだらぬ句ばかりで全くけが父が云ふようにくだらぬ句ばかりで全く閉口してゐます、こんなものを出す者が思いのでせうがこれでは川柳といふものが馬鹿々々しくて識者のこゝろにはよいものとしての中康は残されますまいと存じます、私はもう日ないつもりです」とある。

日く、鐵道省です)本省で待機してゐました に祈ってゐたが、新聞も、ラデオもてんでお 役に立ってくれぬので、口から口の通信では 川柳家のことは少しも判らなかった。山雨樓 用物家のことは少しも判らなかった。山雨樓 常たった。その通信の一部を抄錄すると「今 信だった。その通信の一部を抄錄すると「今

おろしました」云々。
が(上野へ移轉すると云ふ形勢で)漸く正午が(上野へ移轉すると云ふ形勢で)漸く正午

李善洪應援のために來阪した斷髮男裝の本 主き焼で一杯きこしめして虹の如き怪氣焔や すき焼で一杯きこしめして虹の如き怪氣焔や 亡くなった正岡藝陽(正岡蓉君の父)との艶物 語を女史一流の頗ぶるアケスケにやってのけ る。僕の愛妻の眉を氣にして、今度來た時、 理想のものに仕立直してやるとの御託宣であ る。目方二十二賞の女傑ではあるがどつかに 昔をしのばす艶ッぽさがある。これで馬賊に 八十二日間も 引張り 廻はさ れた 御婦人とは 受取れぬ。 (路郎)

三月三日より從前 脚引立の程願上候 脚引立の程願上候間 東京赤坂山王下 東京赤坂山王下



千花庵淺春日譜

正

岡

蓉

△月 △日—

間、結城禮一郎先生の新邸をはじめてお をがれる。西神田、富山房倉庫のわきにて 宏壯たる邸宅也。――先生と「食道樂」の 宏壯たる邸宅也。――先生と「食道樂」の

コードへゆく。

東華軒メ友にゆきて未吹込なる小生の浪曲 泉華軒メ友にゆきて未吹込なる小生の浪曲 で襲撃が、大岡志行兩君とあひ、 東華・大田の平手造酒」「お祭佐七」を 東本「若き日の平手造酒」「お祭佐七」を

べにゆく。――ぶく~~に肥つた丸山軁は片岡君と丸山和歌子嬢と階下へお鮨をた

下太平、五穀成就は疑ひなからむ。

人間――このくらる、失禮になれば、天

演。 地へた一座で九段小劇場にモダン浪曲を共 かると、東喜代駒、井口靜波君らに 小生を

その後、やはり喜代駒君や伊藤晴雨老と でくの主宰する「食道樂」座談會へ出席ーあまつさへ、先年ニットーレコードでは 小生作歌の「ボークだね」なる流行歌でットトーにあてくゐるくせに

と、むしや ~ お鮨許りたべてゐる。 よ」

ほくは幸にして天性、ふとつた女、丸ぼもやの女を大キラヒなればよろしけれど、もし丸山鑢にして例へば伊藤敦子、渡邊はま子、大宮小夜子、佐藤美子、ヘレン本田ま子、大宮小夜子、佐藤美子、ヘレン本田ま子、大宮小夜子、佐藤美子、ヘレン本田ま子、大宮小では、ぶとつた女、丸ぼはくは幸にして天性、ふとつた女、丸ぼ

| 淺草橋場へ。 —— 宇野信夫君の劇談會に列| | 岳事を語ることしばし——タクを飛ばせて 日本ので創作落語の新鋭挂米丸君と、身邊

座にあり。おくれてぼくと鈴木みちを君と するため也の 主人字野君と、わかき男女劇作家二、三

櫻餅」の一句を持參す。 曲によすると前書し「久松に似たる手代や 頃日、はなしかの文都、宇野君の新作戲

野君いたくかんじ入り、旬日を隔てゝ再び は可樂さんのですぜ」 ねとほめれば、當の文都、けどん顔にて 本人に「久松に似たる」云々の句は名作だ へえ、オッな句ですね。たしか、そいつ 文都にしては近ごろでの名吟なれば、宇

の池にこぼれる月影に、浅けれど「春」をは あらはれしとの話、何より可笑しかりき。 つきりとかんずーー。 葛飾の小庵へたどる細道――ところん 6時、ぼくのみかへる。 といったので自作にあらぬ化の皮忽ちに

妻と墓参。 △月△日

機馬樂の無緣地藏へなり。 谷中なる菩提寺と、狂死せる先々代蝶花

ロムビア専脳のシークなる漫才リーガ

りたり。

屋敷」に興趣つきず。太郎はよほど巧くな ポリドール専屬以來、節調幾變轉、「茶碗 もほどよろしからず。愛樂改め相模太郎が

君と、淺草壽司淸におちあふ。 ル万吉こと、じつは、はなしかの柳家梧樓 梧樓君、はしらでお酒――。

物をしてつないで來た妻が待つてゐる。 をうけとり、未だ、のんである同君と別れ 田原町の停留場へ引返すと、デバートで買 春日泥濘の六區にて音羽座へ入る。 次回臺本の打合せを了へ、今月分臺本料 ぼくは穴子の握り――。

し心中クサリたるらめ。 も云はず。吉右衛門びあきの綾太郎、定め 右衛門と洒落たるに、浅草の客、くすりと 宿へ泊るくだりを當人「はりまや」なれば吉 て物足らねど、なかで「はりまや」といふ 切々の哀調、壯觀也。「天野屋」の發端に れど、未だしく大衆はしつかりと摑みて、 もたれをよむ華柳丸は「三馬術」にて武 盲目の綾太郎、レコードの人氣は墮もた

久々の浪花亭綾太郎なり。 停留所あれど、車窓は蒼茫と暮れつくして るの 僅かなる「春」をおぼゆる 何ものもみえず。たど、星屑に、この日も この日はじめて京成電車にのりてかへ 他人事ならずと切におもふ。 お花茶屋、關屋、青砥なぞ、雅なる名の やはり人間は心境が大切、環境がかんじ 上野へでて食事。

佛 支 那 蘭 北 西 京 風 料 茶 房 理

御宴會に御集合に

市電戎橋電停西御堂筋東北角 紅

家ものゆゑ、この人のさつかけなさ、いつ

電話南一一八六番 暾

終



名 と

球の善 球の番鮎太とりゆき 一歩

ン陣營を脅威したものであった。

鳥山一

また、片間さんの「5セット・マッチ論」は有名なもので3セット位では真の腕前もは有名なもので3セット位では真の腕前もは有名ない、、といふのであつたから若い青年されない、といふのであつたから若い青年がより遙に意気旺んなもの有りと驚嘆しないではをられなかつた。

とさえ私は思つてゐる。 とれられるものではなく寧ろ「關西女子庭

學校の御大として活躍した。
甲南高等

曾て、片岡さんは地球をぐるりと一周し 手とプレーをも交へて歸朝され、その感想 手とプレーをも交へて歸朝され、その感想 等は氏の一家言に織り成されて「鶏のあく び」といふ美麗な單行本に盛り、多くの知 友に頭たれたことがある。私も一書惠淦の 凌に強したがそのスポーツに闘する氏の識 際に浴したがそのスポーツに闘する氏の識

鮎は「献上の榮」に浴した。

そこに鮎の群は潑溂と跳ねてゐた。その水清冽なる水を湛えた深い小川が奔流となり、 である水を湛えた深い小川が奔流となり、 である。

券を買つて頂くことに定めてゐた。片岡さ「テニス映畵の夕」などあれば何枚かの入場

ん一家が女流選手につくされた厚意は到底

代、齋藤梅子さん等、いざ何かと有るとい

關西女流庭球の宗家とも稱すべき戸田定

ふ場合には片岡夫人の前に走つた。例へば

服したことであった。 いつもながらに氏の徹底した研究精神に敬 十尺のところから湧いて出ると聞いて私は、 流は廣い庭園の北隅に堀拔かれた地下百五

心うたれつゝ再び元の「鮎の小川」に戻つ 田などをさまよひつく氏の趣味の幽遠さに 鮒の潜んでゐる池、鱒の子らが放たれる水 て來た。 私は一人ラケットを左手にしながら鯉や

球飛んでガットの快い響きは鳴り渡り、こ 氣が付いた。 くからも若い球人達が生ひ立ち行くことに た。その間、テニスコートでは経間なく白 夕陽に映ゆる鮎の群は一しほ太としかつ

あります。 片岡直方氏は川柳雜誌社養助員で

コーチに通ったことがある。 は住友總本店の丸山さんから慰まれて、そ 年の夏中休暇を須磨別邸コートにテニス 住友吉左衛門男が、まだ十九歳の頃、私

さべなみゃ須磨の浦なる若殿御

一步

テニスの渇を置することであった。 時過にアイスクリームやレモネードが四斗 と思ふが、住友邸では晝は洋食、午後時二 樽に冷されて出て僕達の眞夏の汗みどろの 柳人諸君が知つたら無歡ぶことがあらう

るるる は一ト風呂浴びることになつてゐた。皆が 南海鐵道の松浦竹松君等僕が同伴した連中 のまゝ食堂に導かれると晩は和食に定って いゝ氣分になつて「住友家の浴衣」を着流し 夕方テニスを終ると舊デ盃選手三木龍喜

君等と相對して座を占められた。 は左側に、次に令弟元夫さんが松浦、三木 テーブルの眞正面におかれ、吉左衛門さん は「テニスの先生」だといふので食事の席は 君も記憶に存してゐられようと思ふが、私 たので男のデモクラチックな姿は、或は諸 の歌」を詠まれその數首が新聞に上載され 後年、住友さんは、京都大學在學中「襖

太郎さんは微笑だもしないかも知れぬが「 何うです、僕が酒が好きであることを誰に そんなことを聞いたとて、路郎さんや三

0

ば遉の三太郎さんも喜んで臭れる話だらう 聞かれてゐたのか毎晚、僕にはビールと酒 と考へる。 の相手をして吳れたんだ」からこれを聞け が出て宮島さんといふ年配の方が特別にそ

すめて行からとする。 を降りるとの須磨の小波は僕達の足許をか 夕食が濟むと廣い邸園を散步する。石段

もの「須磨の若殿御」が沈み切った夕陽の邊 ゆるとき僕は遠に急にスポーツの意義如何 ら立つておられるのでその姿が點燈に仄見 など考へさせられたことでもあった。 りを物思ひ深げに「さどなみ」を耳にしなが そのころ、青草にはもの静かな騰揚その

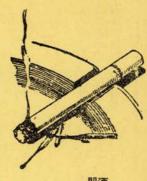
×

リヤード川柳と名づけられました柳友皆様 役格だと云ふのだと云ふので、その名をビ が撞球場を新設されました。 御來場を私よりお願いたします。(一歩) 球にゆかりの深い汀柳君の弟さん楢雄君 汀柳君が監査

本町四バス停西の辻南入 IJ 柳

IJ る お ぬ ち ۲ ほ 1 は 3 1. 花魁を見るだけに來 累卵の遊びへ落ちるネオン 戸をあけた片手へらける朝 ぬきさしのなられホテルの灯を見つめ 力行のきざはし登り踏みは ちつほけな家にも矢張り七五三飾り 兵隊を泊めたで庭のみかん ほれてゐる强さ十九の裾さ につぼんにつジャマがありダイシャあり 初春を冥加な ろうそくの暗き明治の舞臺 いる香まだ餘つて女 * 0 た 將 K 京 運 Ŧi. 0 づ 都 刊 * ば 見 轉 + 灯 L 驟 紙 き 199 手 3 也

de ò む 6 な



即酒興中

3 は 111 柳

與 春 史

汀

わ

わかれては憂き日の多し

格

落

0

ね そ n 1: ょ か うるたへてついアパートの戸を違え 磊落の旦那の髭がどじよう 南無三寳疊の上で寝 寝ながらに聽く尺八が冴えており 相談は女將にまかし 零落の姿をつ 飲むほどにビールの泡の淋しか 流連は七草粥 たいくつな男鉛筆ば 四人して夜明けの宿の戸 可愛さが除つて憎さ むすめ十八兄の學資を引きうける つねられた縁が二人の身をおとし 7 ٤ な t てゐ 猫 か 0 あ K を IJ を 3 劍 12 H た 抱 禁 舐 uh 研 ŋ 似 き 10 40 83 4

0

Đ, ゆ U め き さ ت け < あ T え 5 ま き 天國へ 狂 女氣の生

末ひらく洒盃へ擧が 世間とは遠く離れて 最合傘こゝか ゆるしての女の反語履きち ひとりもの夕餉の膳の寂 縁切りの話の 身上の程も知らずに 魅人られし女あわれ メリーゴーランドパ、も乗せられる さすらひの男うらやむ日もありき あこがれの大阪に出て出世 縁かや渡舟でいだく破れ三 こうしてはねられぬ球を撞いてゐる ふいに來る客にも女將愛想 景氣よい話の中に酌 待ち呆けの目に海上 破れ傘に友の 苦勞しながら子賓に 人の瞳に雪 活 步 の愚痴が咽喉を なさけの身をひそめ 6 手 膝 が 前 先 は 降 月 惠 る は 揃 嫁 ŋ き * 0 0 丸 を 娑 雲 道 L ~ K 鏡 櫻 ح ま < 唉 ほ 譜 6 中 34 が 世 婆 味 ょ E 遠 れ 出 月 請 8 IJ る 心 3 る

が上記

ました 説を聞くこごにい る諸先號にお願して H 木柳堰の第 線 12

初 心 者に 與 る

北 Щ 大 柳 主 宰

東

谷 五. 花 村

るの のである。初心者よ大膽に、勇敢に作句し給へ、先輩も先生もないのである。 人でもいく、暫らく作句を續ければ、其處に眞の人生詩を見出だす事は譯はない る事が吾人川柳家の責任であり務めでなくてはいけない、而も概念でもいく、 切れを構造せんとする、鱗む可く、噴飯の沙汰である此等素人の觀念を絕無にす 狂句に墮する事、殆んど萬人が萬人である。所謂概念句の大部分となるのであ 凡そ川柳を素人に强いて見ると必ず、川柳らしくと願つて却つて川柳にならず かくて自分自身の眞の叫び、眞の詩情を言ひ表はす事なく虚僞の文章のハシ

對に有り得な 偶然の名作は絶

た吉川英治氏を始め、久米正雄氏、

雜誌の座談會で雄子郎と云つた川柳家だつ

山

光

に似るな」と對照的に續けて、苦心の結果 ない事が多い。假に路郎先生がペンを握つて の無い事である」が、句評や隨筆にも腑甲斐 な意見になつてしまった。一と言ってゐる。 違つて來て、結局モデルの筋だけでなく公平 出して中途で變になり結局書けなかった。 等が、テーマとモデルの話の中にo 久米 俺に似よ」の力强い言葉に魅されて、「俺 眞面目な川柳家に言わせると「質に腑甲斐 俺に似よ俺に似るなと子を思ひ 一最初書こうと思つてぬたのが段々 ―者から持つてゐるテーマで―書き

對に有り得ないと信じる。 見を思ふてゐなくては産れ出ずる名句ではな たら正しい作句順序でないと思ふが、 が、最近から愛見を想ふ心がなく偶然に出來 此の意味で偶然の名作とか言ふものは絕 常に愛



百 醉生そ 補 二師 副 ス 充 官 策 .F. 團 0 輪長 げ 0 てる 兵 か のが 首 ね 未 K 集醉爲に 繼 桃 來 尾 3 仕 男ふ 85 子 が n 待 n 子 送 の言 ば 切 0 T 12 17 る 額 ひ氣 如 0 ま 10 はさ 要 < ま高 利 字 用れ女る 儀 並 は二 すし 4 顏 金 醉 敎 白 家 馬 は ば 本 が 3 < しるし れ跡耳 ず き る 1 る

近作旅档

路

郞

排 大 A 大 版

柳同同沐同同同柳同同同大

大

昌 天 佐

選

門



醉 按 塀 動 瀆 恕 生 猪お 戀 炊 金 テ 水 事 持 百 ふ摩 П 11 職 ま 活 < 場 階 難 0 IJ 通 n 尺 程さ K ic 0 1 雲 K 天 灯 な 0 す ス 閣 下 盡 戀 父 にん 0 出 な は 程 E 10 さ ま 話 は 昇 人 後 爆 世 情 度 あ 無 Ł T L 茶 h 竹 婦 世姿 8 頭 金 か ·J. 交 カン を 曲 が 閣 ス な 6 K 觀を 番. n HS ٨ 25 議 山 風 5 8 は 見出 の置 ば 0 名寄 形 要 7 島 L あ K な ク 暮 す な 菓 合い 女來 田 る を 附 る 虻 子 夢 ま る 忠 ね 2 見 Ł T 蚓 逃 T は 8 0 2 ス T 親去 0 間 2 平 2 出で な か 居 買 る氣 LE 味 千亿 1) 塔 3 け 75 死 3 る is ス

T. 同木同讓同 歌同九同公同み 同同 柳 同 同 李 3 都 き 履 葉 美 を 兒 る _ 路



婚队更只元愛背儲 大 お人 鷄 ス 夢 裾 結 は 禮 L 旦 悄 元 生一 0 3 5 局 組 のつにへ美 賣 を 乍 0 は 日 た 1 額 0 吠 6 6 ほ 寢 ホ 8 V 7 金 螺 3 子 ~ 5 立 な 1 5 不 0 to 0 n 〈線 0 元く 街 妾 10 け を 米 か 足 な 1 且 事 宅 階 だ 7 0 L 額 12 隱 19 人 賀 6 で け あ T がへた段 河 12 が IC 狀 妻 82 出 7 犬 7 は 食 E 行ん降 な 豚 4 K 來 K K 趣 る叱初 取 は b つ雪り る 0 味 純 子. 檢 してに b n ら陽 多 がて 箸 カミ 戾 喫 出 温 れ映 落 行 初哀な to 7 ま 1 重 來 し茶りる 車霰れり るえ 器すひつく <

治 同翠同梨同 同 善 玻 同蕪 同 佐 桐 木 曉 [i] 患 保 0 助 7 峯 花 童 朗 瑠 人 蘭



諺 灯ホ 澤 何 儲 Ti 無 病 人大逢帽鮪看木利ラ 護 s 子 阪 4 は \$ 宅 遠 廻 111 護 魚 " 4 E 婦 た は自 婦 未 b ま母 チ な 彼 慮 掛 0 分は 夜 1 じ健 行 \$ が 0 0 7 0 丰 目 T 0 は 太 師 病 果 午 要 H 前 話 -ス が 知 在の 然 ば 红 領 後 夫 蓉 5 で ラ 邪 識 手 段 0 Ł 御 不 0 る 儲 \$ = 婦 顏 短 念 \$ K ス 書 ま 前 か 動 1 見 云 落 た 3 ほ 継 0 0 チ 6 0 初 T る 0 去 湯 Ł L を 底 6 8 0 な IJ 工 皆 酒 カン 6 K V が な ほ言 勤 П ア 見 氣 な 水 Ł な T 松 灯 82 冬 E 沸 80 K S 0 T を 問 IJ K 知 膝 が 25 4 Ł 來小 は 論 ぎ 暗た る な 飲 召 な ス るり to 言 し音る b 2 1 きれ 0 L 10 b 1

大 红 京 良 同 九同心同悅同觀同 同 薬 同 白同 比 同 雕 章 呂 府 二 月 志 公 魚 柴 泉 菊



氣 採 銀 牛 働 巡 誕 倖 天 ワ 春 あ 思 H 北 卒 植 造 fesal N 獨 き 木 風 業 禮 世 才 0 用 襟 0 生. 屋 出 ボ 6 樂 0 が C を た 火 を 灯 を 弱 0 は が 25 0 10 1 H 葬 \$ 2 な 手 夫 湯 さ 場 ル V 通 K T 廻 t 氣 to 許 6 1E ま 本 が 風 世 な 0 獨 h 0 付 景 家 知 H 女 b 婚 n す 買 目 3 身 ぼ T 5 落 4 は 時 5 立 0 T 來 る 下 お だ 2 主 カン 射 新計 父 T 素 駄 步 0 灰 7 義 H 3 七 6 的 親 聞 を 飲 足 Ł 置 デ 箱 ま な が を 者 灯 前 0 椅 言 82 三捲 振 b 白 場 狹 す 3 拜 が 子 3 1 視 窓 3 洗 b 0 き あ = 5 < 叉 0 VC 0 か 3 を 行 と早 面 返 か ケ 浮 な 青 H あ な 0 n 5 器 b b b 寢 き L 日 4 b to る 向 80 h L

同 大 伊 遠 抱 同 帆同靜 同 天 同都 同小 同 葉 同 秋 同 見 紗 風 無 緒 路 月 哉 路 子 子 樓 草 光



受 1 運 笑 上 昇 義 年 W 銑 圓 候 2 若 あ ま 5 エパ 給 太 始 轉 は H 判 Vo 夫 本 補 C П 0 醒 \$ 客 使 手 礼 0 を 婦 老 は 夫 1 6 め 旅 义 賀 主 バ 7 飂 山 な 何 82 妻 な 0 1 82 世 0 命 5 靈 步 人 程 狀 " 處 な は 0 酒 苦に 語 積 0 0 は 驗 肥 は 女 K 7 力 1) お 相 數 = な 2 戰 6 1 冷 東 を b 氣 h 代 Ł 醫 て 0 K 机 を ほ to 談 83 で を 老 る 見 西 は H な 時 5 し知 ほ な 讀 語 通 を 貸 南 7 紙 る V C L てつ が 言 米 3 る B L 氣 宿 幣 夜 2 Ł 北 は 吸 \$ T T から U を \$ T 0 整 が 初 0 居 な 吳 尖 入 去 世 わ 潶 部 白 ま 器 す る な b K n b 詣 4 畠 束 ず 屋 7 to to

取 路 澄 京 11 久 駄 + 春 靜 小 浮 立 秀 黃 晴 IE. 米 留 九 巢 城 判 風 司 貝 雄 里 緒 嗣 鬼 更 峰 4:



單 カン 成 あ 逢 朝 衝 総 あ 何 結 + あ 體 番 父 喧 F 4 之 艘 線 時 第 n 立. な 納 溫 附 亦 敵 2 埶 3 7 す 0 は た 月 計 な たぎ る \$ だ 0 K b 俺 世 驛 E 2 氣 Ł ま 落 な は を な け H 載 思 K 0 0 長 0 K) 0 私 5 き づ 研 3. +)-T 5 0 を 5 餉 る Ł 苦 0 大丁 L T 曉 3 4 7 h 感 酒 泪 ょ 0 母 る 10 T 金 時 手 10 手 1 デ む 5 から 情 ~ C を 親 佇 ゼ た 自 から 缺 計 0 5 火 T 冬 が Ł を 拭 は 0 あ H 1) が 今 金 私 0 は 子 白 女 茶 を は 心 爪 b T 止 朝 息 5 10 が 好· 力. 信 鏡 Ł 0 清 を 態 年 0 き 75 かい 急 K 1. 持 出 2 K 這 0 0 見 6 カン さ 4 17 ち す n 力 b す ス L 端 街 す 末

石 I T 天 光 3 琴 榮 美 靜 174 4. 庄 水 明 公 文 水 Ш 源 之 5 津 III 郎 國 5 泉 進 生 波 塊 平介 客 芳 Ξ 風 庫樓 兒 太



hil な 素 純 77 傷 義ほ別急か元線 悔 白 任 不 情 僚 夫 心 理 3 机 病 n 且 陰 ゆ 3 思 -6 程差 を 婦 間 醉 る K ね 2 0 10 議 2 醉 な 不 ば 醫 n 留 來 77 1 朝 な VC U 戀 來 h 商 が な 者 守 T 靴 \$ 御 VC T 園 10 Ł h たぎ C 6 は 疃 を 力 \$ 1) 緣 足 欲 機 74 111: る I. C ば 1 82 16 受 6 磨 は 0 は 街 カュ 3 け 場 ¥: 娘 本 械 な 辭 < 通 70 吉 づ \$2 0 n て 兼 は 5 日に * 5 10 人 12 喫 泣 かっ 火丁 居 な 妾 な 寒 使 L の白 奶 父 * 极 風 < b 松 飯 店 77 1 女い 30 12 0 が T Ch Ł ま が 妻 K \$ 靴 貰 2 分 教 鏡 け 3 7 あ 行 風 な 4 あ 0 目餅るれモ 3 H る b b き 51 b 0 先 h 九

陽 古三 [17] 痛 寒 狂柳 雨 瓣 夏 麥 肱 義 柳 都 笑 4 IE. 左代 快 出 風 뀝 坊草 男路下舟右吉子生一子香 南 逸 鬼



拜 外 そ 丙 母 今 夢 何 34 +}-パ 2 妻 3 あ 初 ייי ば ヶ IIIL 頃 七 見 善 日 8 0 0 は 殿 Ł 7 力。 無 は ギ T 鍋 Lij 顮 を H は は · C. 5 風 b 1 1 4 食 あ 事 餅 \$ 緣 0 大 カン で 費 + 見 は は 白 椿 僕 兎 な 養 0 七 3 0 樂 き る T あ n 云 \$ 3 V き K 足 0 L 子 供 な な な け 3. 果 T 角 衆 3 海 食 h П 花 袋 過 な T 母 餅 ほ 券 で は 浮 事 を 去 年 16. 3 力。 肩 轁 0 0 T 買 を な 湯 85 を 3: Ł 3 る は h 10 旬 步 \$ to な 炬 b K る 寫 な П は 仕 b を づ ほ 0 舞 眞 燵 3 初 0 茶む n が 身 ね 4 語 詣 E な 會か な 6 た な 世 机 b 席 す b b 4 る でる

伶 朝 祥 曉 井 鐵 芳 柳 堯 康 登 菊 圭 美 笑朴 之 津 1 0 美 雨 風 月 童 蛙心泉夢子 夫 也 路 介女 朗 泉



柳指

指導講座

技 發表誌 切

課

題

旅

行

人一

句

本社事務所宛 五 月 號 塚越正光氏

講

師

新十 存 板 雪 ぜ 7 加 步 11 留 子. 圍 8 U V ナ 终 1 兒 取 月 Ch to 6 又 0 < 命 4 誇 を 0 向 1 嫁 を 披 自 直 連 b H 3 建 K 露 111 から 0 渡 \$ 0 線 n T な 袂 势 6 す 知 ま 的 T る 1 バ 働 6 を 歸 1 な 0 17 當 見 \$ 抱 者 82 \$ 文 戀 1) 屋 來 た 見 額 < を 0 字 L \$ V T 道 を 知 大 17 -C. 女 不 借 3 な 書 6 晦 行 長 氣 .F. 家 な 持 1) 1) き ず H 分 1) 吉 しる

兄 三 不 竹 非 寒 正好永 青雀 常 Bul 14 迷 號 彌 兒 J. 穗 郎 果 整 兄 子



春

風

山 本 13 洣

選

春風へスキー 春の風琴ひく 春の風此 春の風質屋 未亡人に戀しろ 春風ニム 2 0) 麥 は 1/1 處 女 生 のの 事 0 爪 產 を れんゆ を \$ 1 業 務 私 3 地 4 0 煙 2 オレ 油 春 5 1 春 2 風 美津生 同 津女 曲 公 風 春風の 春風へ濕布し 今日からの春風椅子の向きを (佳)春風へもう底だつたイン 同)春の風らつろ心をあはて 同二二 同)號外の行きすぎてゆく春 同)春風にはらみ女のき 炭 風 中 から 間春風と行くシャボ 天 主 た 0 身 閣 好 を 4 影 to 0 旅 2 2 春 30 牛 替 忘 Tr. 0) 0) 風 산 E 風 12 174 赔 帆 兄 珠 塊 果 童哉 兄 風

風

風

春

風 20

を

賣

物

7

同社上町支部幹事に就任す。

柳 家 戸 籍 調 (檢

募集句

先(7)好きな句(8)自信の句(9)川柳以(4)出生地(5)現住所(6)職業又は勤務(4)出生地(5)現住所(6)職業又は勤務 外の趣味(10)配偶者子供の有無(11 なもの(12)川柳に手を染めた年月 (1)姓名 (2)雅號及別號 生年月

年川柳雜誌社同人として入社、十一年二月 手を染めてより約七、八年は經過、 中學在學中より同人文藝誌に關係し川柳に 歌舞伎の女形、金齒の多い女及び男、 時には詩も作る、讀書、(10)妻有り、 捨鉢の心理性を問はれたり、 の相違を知った靴すべり作者不明、 屋營業、大阪市役所社會部勤務、(7)見解 にては「夢生」、(3)明治四十四年一月二十 (5)大阪市南區南桃谷町一五番地、 一)廣原重信、 (4) 奈良縣山邊郡朝和村佐保庄、 (2)都會人、短歌及び俳句 (9)歌、 昭和 (6)質 8 11

置

原

都

會

人

卒業證故郷の 卒業がた ビ

かい

卒業がデカンショで飲

む

料 取

業を

L

7 就

職

野

球

は 間 思ひ付あ 卒業へ伯 卒業はもう故郷 卒業の見込あり

0

7

卒 引

鳅 る

父が

取 業

不

倖 3 6

を +

見

卒業へ父の不義理をき か

30

れ

<

卒業の 卒業の發 卒業の子 卒業の思ひ出桃

昔

話

Z .6

表

#5

不

安

ts

最

善

案

寸

か 負 卒

空想も希 しばらくは前途

望も

ま

6

記念樹の遊で抱

1

合

卒業へついでのやらにほり出

を

卒

卒業の歸

0 #5

0

卒業の日

·C 士 卒

業

山 本 丹 選

1) 0 世 H いの助二 陽出男 交 光二 薬 薬 兄 郎 庫際 光 路 泉 魚 七 雷 兄 卒業をするとむ 學卒へて故郷へ歸れば 卒業をして學校 就職をせ 親の云ふ 卒業をしたか此 卒業へ墨 卒業式成功した 卒業へもうはど 悪筆を残 (住)自惚が薄らいで來 (軸)校庭の隅三月 (佳) 恩人にすまぬ順位で學は (佳) 卒業を見た日親父の慾が 住のらりくらり卒業の子の背丈延び (佳)高女卒スター自身の知ら (佳) 卒業の祝だ父は飲 (住) 卒業は野球で食へる時代 0 をす 率 1 朝 82 通 ナ 業 1 は 卒 から を 頃 る か 0 は +5 特 卒 を 177 逸 が 1 別 業 H 4 5 7= L 泣 < < ま 早 O 12 8 75 祝 壁 60 < 2 卒 3 撩 ま 事 力: 卒 は 7 ぬこと 5 -E 言 少 す 業 世 型 養 1 粧 3 落 業 起 れ 3 2 3 3 女 B 所 2 B 2 箱 < 5 3 U 春 秋無草 秋無草 緩勾配 都會人 明 晴 光 遊 珠 哉 珠

平 井

> 節 子

俳句、 に入る。 大阪市港區東田中町四ノ七四、(6)ナシ 六年二月三日、 (12)昭和六年十一月俳句より夫と共に川 (8)愛人の母に任へし嫁ぐ夢、(9)詩歌、 は如何にさびしきものか人の世の(汀柳)、 (1)平井節子、(2)瀨津女節子、(3)大正 (7)ふりむけば君も小さい並木路(葭乃)名 (10)有、女子一人、(11)蒲鉾、嘘、 (4)大阪市北區堂島、(5)

佐 藤 芦

村

(464)

山市草戸町一〇〇一ノ一、(6)太物卸商、 十二日、(4)廣島縣福山市草戸町、(5)福 明、靜石、子善、(3)明治二十三年三月二 Ŀ 元年十月、大阪新報川柳、大阪毎日柳壇紙 オベッカ言ふやつ、裏切るやつ、(12)大正 (7) 咳一つ聞えぬ中を天皇旗(劍花坊)、 (1)佐藤弘人、(2)芦村、 (8)なし、(9)書道、漫畵、(10)妻、三男 一女、(1)野心あるやつ、自慢するやつ、 日堂、日章、

席のく H

光

プ

は

東

で 作り でき止

ス

1

只

くま

與

默は法正

を持がてえで聲

りるりし

3

L

す 1 1 1

1

0)

4

4

れ創を句るあちのい



理整•樂艸•柳汀•郞路

文字 開

確

H

場 瞭

所 K 1

0 0

2 2 0 こと

用

な

る

稿用 載

紙

五, 四 三

投

稿 切 催

先 は 月 IE. は 投

は

本 月 及 明

社

事

務所 とす 記 記 原

每

末日

た権は、 春氏 Ł 力。 一限 0 0 \$ ら般ら H たこと ともこの 0) 數 10 は雑れ fi. 歌 意氣に 旬 社 無 能 たる H 仙に就 たる調 會 0 0 限 程等には似い 化 0 H 趣 夜 內谷 L れて」の床しき講話 くのうちに名残り 山 昧 た 地えて 筵とも て、 Ш を 0 持躍 **兼題に** 雜 IJ 於日 大雑誌と なった いまや を 打ち 本 なく 話は 橋 しく、 E 本の 似 50 更 相 月陣 び よく けてい 出 1 ま 如容 1) 森題と月を 東さす例整 • 0 W 名 本敢 停ス金泣欠スト電子借き伸上 ス

淺魚れる質の實號

義柳白德 淋春路 呂三雲三果光郎、 東喜溪集角汀 勇 多 聞世 十朴 天 L 春山鶏靜綠凡安 秋、牛波雨、平 牛波雨、 秋、夕鏡 、中子、默平、素人 、東三郎、沐天、 、東三郎、沐天、

かこみ 1 (等まがつたで)給化が讀みで 1-7. 1 赤 欠伸 1 1-ブに手 を かれえか 廻り 吸みつ をの 3 だかせる を並 な持 ts 70 11 5 1) 1) 1) け 菊十鮎角史詩淋集 儿 與 人柳美嵐呂 一果英 選擧子 一候補墨 へ正 生活が

潚

ス 7 ス 1-1 1 1 題 力: 0) 頰 の中間のビ 話扉 總 かい 質 歌を滿塞 選 せの意ふ聲な人むない 紅暑を 氣地れ冴るのける瀨し近 ない出 シ戸て 幼散て 執なある返な太せ「火るけ 稚髮忘 るン鉢僕 園屋れ 詩禿東大史與鶏十默德菊 詩不禿 三牛九 與 一山魚綠呂郎子柳平三人英 一凡山

稿 清 規

猫の仔をといるなどになっている。 夕け夜題 あをきは手に かを電 猫が知がい 笑ひ 九 E 、霞當 ti を震 のは人 る を出ている。を出ている。 追つ た良育こ 4 似姿くつな知 か をて か氣見なで 受て當だたす り見 < けなえ す育ていら仔ゐな 晋打開 るちる日ず りずぬる 路 鮎德集斗天鶏溪默夕鮎 默不東鮎溪 喜默十同菊詩不夕鮎春子雨鮎史 **学** 美三英風國子坊平鐘美 與 花 九 平凡魚美坊由平柳 一凡鐘美光

突初御い店 きる者である。 つののひス にけむ娘 1) を 娘ん りのして残 松に子を娘ん ふ商 東で玉変ので 1 る さ噂母て嬉 娘同を が氣に 1 くののる から 町線と座顔氣る び き友た 横 ・がにに 云行決淋で ら出そ來 來れる りれさ 3 默鶏 喜柳 鷄春詩十朴廣德不德大靜 同 4: 4: 與九 平子由三 子秋一緒堂々三凡三嶽波

ち 合ほ咲 燵梅匀 0) せ 土でのひ 走梅た人村梅梅 朓花 をが めが水 れて咲の や咲の醉な褒散 き花ふりめ 1) ぼ居 か菊朴喜天德溪鷄與禿春東 花牛三 人堂由國三坊子郎山秋魚

(住) 不日とは (社) 不日とは (社) 不日とは (社) 不日とと とし L. け 自働けぬ指口 れさうな玉を突き べなるへはか 球 指身なねる 4 を愼妹て げないにないに 手つ足 ぬ重が てがい 月 7 3 の球玉短返突屋 セ で又 は 野 へ考も 星ををか事 次ら 月突突すさ忘へ拔突なれ をひき ならく れる 夜き きぎれれるけ屋りて 卷與天同同東同德同與春詩世朴天集十 三 與間 九 與間 秋郎國 郎光一音堂國英緒

瀚 選一

の風日のカーの風日のカーの風日のカーの風日のカーの風日のカーの風日のカーの風日のカーの風日のカーの風景を

をかかれる

び降の

迷美呂

末母人つと間

來動 る

選舉

丸

か り灯

せ

は霰

(佳)淋しい日仔猫の 簡 へ (佳)湯豆腐の主人の (佳)湯豆腐の主人の (佳)湯豆腐の主人の (佳)湯豆腐の主人の (世)湯豆腐の主人の (世)湯豆腐の主人の (世)湯豆腐の主人の (世)湯豆腐の主人の (世)しで紅へ仔猫がません。 (世)して紅へ仔猫がません。 (世)して紅へ仔猫がません。

と書

く女の

り豊猫猫手事れきけ

同天溪鷄角與喜不沐 花牛 三

國坊子嵐郎由凡天

ある

體走れ膝

たの仔仔

る

雨

け

無さ

て投え鈴

米街心鶴錆十十赤極 横はは嘴が二一ば譜 た日一ば譜 廓男椅 の灯とは 二い月十二ば譜徐二雑川 櫃はは、 はは、 は、 は、 は、 は、 に、 者いの心 治月ら自題月 男風よ をなせ H ろりて う女男 十村よが月へ一二イ 於 灯泣心 二な青續の風日月を 來 とかを いく風が足素叩 十十十が拔 もさ確 直〈 のニニニとけのなの なれめ 庄 りるる 介 三巷大 夢砂天三祥都巷俊笑 雷 選 詩痴雷 之 迷朗人波月介二治鬼

廻起鰻鼻鼻香りる屋を筋具 **椅子る鼻で通**の 過りキネマ 鼻道ゼ 着でで変に た寝りまでの苦を変に苦 丰 の具い 赤のたはネ ヤ い様く娘にの の戰は がになさあ方 捨催の嫌追に見 社鼻香んこ て促具と夢艶あ 向 長をにのが 3 らに足女をがた な出疲惱れ れ行着の追あら 任 りしれだる ずくる子ひりず 詩 朗 柳三天宥巷梟 雷痴 雷 詩 人波人洛二人 鳥迷波葉二人則人

(天) 队龍梅器の (大) 队龍梅器の (地) 梅匂ふ部屋 (地) 梅匂ふ部屋 (地) 梅匂ふ部屋 (地) 梅匂ふ部屋 (地) 梅匂ふ部屋 (地) 梅匂ふ部屋 五. 社柳 松 繪屋局がンをる水無にチす跡 I でで庭近髷殊はの言ニュ 師 い儀にい出更あ捨がアラ屋目 走 が梅腰で大らてま人梅の立 句 云きがを來事ねどだ相が梅つ ふ国咲伸さがどこ續對唉のな 高 姿ききしうりもろきしき花り 根 東菊不同春同史春同十同詩綠 與 ナレ 魚人凡

父新原原原原原原本原原 母問籍籍籍籍 着籍 あ太 開発籍に わ陽 墓が母訊問閣凶の流 男に生 題 石書はかは下作心 く平私れと續原 れげ 働 世 か な籍な見櫛じの打て ね男 りに日默さと畑 明忘園 ばの 原恥をしす力ば な赤 れは 籍多送たなあか たれ らし りる 6 3 ぬ戀 庄天砂迷喋錦柳 痴詩

介人朗夢朗葉人鳥月二

11.

鼻は

6

Hi.

4

創

題 0

れ

二葉介月人迷介兒

世起起起大村起こ越 エエエエ 臣長式町 式式式 ミ式出の大の式 清土 題 守られて狐をきてのみな働い前ののみな働い前ののみな働いがある。 社柳 た摩 光工 今 明費 治 泥前きや を忘 句 I. て泥委泥水い 仕の來並起 か起二 冬がををすけ まれるぶ工工ら工合 のつ替吐まれみれ ひん音様式式す式瓶 鳥 巷錦都祥柳夢庄山 人 三巷柳莞砂祥天喋梟 詩 痴 波二人洛朗月人朗人

ッ燐 H 顔燐もチ寸燐 コでを がす 於 一寸「燃える 銀 行 酔軽ったで 樓 E ま雨獨 てん 200 ゐず 朝者 宵同同 心文 府庫

(軸)と

私私學私生生校生 見見見の 兒 ののの歸の 重の重へのは 0 3 題 父は 機優は 月西へ 眼 子 格 下 は くも は 口のる陽 校 ト何私を 私 馬 パ別 起 起 の味も 見 イア用笛 は 起重 重 弦 生 重 機は \$ 2 月 00 を から 機 度 機 みんな 鼻 知つ いて 師鼻の 無は ま右恐 恋豊 な 5 7 よにれ みの カン 1 、先來る たになり 空になり 5 9 身 はゐへよ 下 H ic 體ぬけ るけ b 3 府 心曉女同宵 心宵曉宵曉宵柳曉 府童庫 明 府明童明童明石童

ロに云へる戀はやつばり頻 氣まぐれにみてもろた手相 氣まぐれは淚おさべ先生の 気まぐれは淚おさえて 爪 氣まぐ れれで な 事 1. n 非 年の限がとずまでれだいる。 生の限がとずました。 が関すればよした。 が関がとずました。 が関すればよした。 が関すればよした。 が関すればよした。 が関すればよした。 がとずまなれだ。 がとずまなれだ。 がとずまなれだ。 がとずまなれだ。 がとがる。 がといる。 がと、 がと、 がといる。 がと、 がと 段 汰 ま 6 れす 同大茂都 総朴 遠 心之助 出 子朗 泉 櫻 朗

爪藝

弾の

響と

富者の愚痴を言うで

子

ま

7

ゐを笑けま

をき

U

る 都

> 朴 大

泉朗

藝掘 交り

をも捨

者言老て

ひひ 7

つた働

雷笑雷

白白

粉灼

の顔がごろごろ寒そべ

25

0

大欠伸藝者だまり

0

朝

が來た

大好

朗郎

題

白

粉

茂

子

が知つて ふたを言ふ えて 彦の日 臍 2 1 L 記 男に 根で光 1 < 女 3 か か たなみつ たけで け 記 b 2 付 房 でげ强結 覗 賞め **皇筆が冴え** 2 5 くば 3 8 られ な なら逢 二まなれ b 1 りる 3 庫 曉同宵柳鶴 交同曉宵同鶴心 明石聲 庫 童 明 私生見の変 目目 目目 私生 目 日葉へはつきり をさ 兒 0 淚 0) 滴して 力 あ 二時映 目 し見ら音滴計る のせ しを無のス 事たふ叱駄頁ク を借がつてに にのとらにをリ ゆり育てゐす すど思れ落き きぬて來るる る佛ひるちょ

臍臍臍臍臍

b

で買ふがを持つ

くり

くり

0

出

くり

母

0

記車記新者中者住

者はそ

記

2 0

云第

心柳心曉文心文

府石府重庫府庫

年口星

赤

3

眼

0

行

<

1

郎助泉

題

短

靴に

して

1

簸川 川柳 第二支部 高 松 吟 社 忘 年 句 會

+

月 れ 身に氣まぐれな 題 0) + 牛木 -E H 7 夜 欠伸そが 大 朗 居 力: = 於 5 好 テ 3 島 郎 根 都子朗助 選

制三制約東の開発を 賣師日 出走給 田しのビラに氣が石へ暮の重さが 席 題 情 週 間 氣が かい 期 散きの る軒し 暮がか の並い 市びり 之 助 同綠笑 之 助朗

題子制か制 へ服な服の まん ま 4 こく 門朗門朗

古本がありた 不まく 末解みえ 0 のえて の音がまばらばらばられていない。 題 れ男氣 題 多 そば打っ 典太者スクラーかかなし紅燈に t ます 醉 び 街 ひとはなりて 年 0 末 橫 一音が牙 街 れ 風 クラム組になり < 町 0 な 灯が 雨 が踏 灯を浴る 5 K ·C 8 0 むだだだ る 二ま あ b U 大 綠 遠 綠 好 大 好 之 出 之 朗 助 櫻 助 郎 朗 郎 綠朴之 同

府

心同曉柳心曉

童石府童

氣

0

鍵

火

0

用

心

0

札

力

3

心

府

白粉瓶塵埃り 娘さん白 粉で 白粉を 一點茂都る 當忘年 な 空 3 イ吐 粉よ乙女 0 0 0 1 L 落 0 茂都子女史の 酸 すかくして 句 こムろ 決心 7 粉 せ 3 會 0 尖りた師 白頰哲 かもとい 0 " 1 カ ば 意存義起ら から て又 ル ムフ 粉は學 白 悲 += 顔を拜し くの手打 走風どこい 4 途温 ラ 秋 AI 3. を ところで 時 R 頃とろり L がて か をし 生 0 8 たことひ わ そ 改送) たん む ぬ來出 0 やら、 り朗らか たることの お 畫たる 5 15 女 とろり 别 とし 殊に な爆笑 れ 1 同綠大朴好雷好 0 ガ 大ひほ紅 サ 助朗泉郎門郎

雜川 誌柳 今治忘年 句 (愛媛)

0 1.82 題 月 妻曲出がの # = 鍵 H し鍵置 ののへ 貯 落銀 神殘殖る任貰鬢奥殘 をかつ者 行 支店 うならてえ 出る彼月いけで出る 崩 柳心柳同心宵曉心曉心 報 府明童府童府

軸佳佳佳佳佳佳

袖

ムみふと半

半子來 歳鐘供た

き腫

の音 はよく 緣

7

3

冗談

る

2

75

袖

7

何だ」み背の子供修談を斷つて來り

席

題

だ

7

22

曉

IE 袖

月の

包ひ

思ひきりで

叱ら

れい

ムみ男

は

治

5

袖

ムみ猫思ひ

か妻

筋

5

を

7

古財鍵

風布

\$ 鍵妻 T

もど この

3

b

つ鍵

興つえ十さひ

がてる二な

石府石

はま

+:

記憶から 記憶 軸 袖 題 2 明後日 始 を辿るが 末 辭書をく 書 また 飲める T 0 てゐる 末の 鶴 書け 心宥柳 同曉同同宵同心柳 府明石

吉兆をかず

ぎり 七食

へは

る賣

膳れ

つる

同同

3

T

ず

笑 どは 月

+

日

感 ま

ゐ

IJ

福を受

夏みかれ 神多 湯全湯湯湯 夏みかん戀のフォール密柑縮喰ふのを 別 に神棚の密柑が落ちて本 たんぼったんぼ Щ た快 んぼ お 6 2 爺 賣 題 IT 正月密柑 高 ぼを入れて無慾の昨日ほの冷えに寢ざめて雪はを抱いて居候 丸 く 題 を下 6 0 下へ頼んで 宵を 冬 れ る密柑 至 湯 3 0 祭 た か 2 來燒 \$ 7 1= あ ぼ N を 百そけ 悲 は 雪を 5 度 奴 れ 日 < 1 じ今 ま 買な な 癡 出 知 狩 ich れ 1 ひ b 1 9 宵同同曉鶴 心 同宵柳鶴 明 童聲 府 童 石標

齑 明 府石 人格者端人格者端 総紙で 海神酒 梅川 田柳 6 腹 ける る夜 ナ 支雜 0 事 人袂 部誌 減 ナ のを なに 戎 す 出 外 たを べ皮書 かい落 碎 云 1. ふけ 九 へ負 はさつ辷たたるたた笑け D いて 9 つて ななるか格格格格格であの りるけ者者者者者るず席 曉同宵曉同同宵曉同宵柳鶴 明章 明童 明石聲 童

始末書を書 天 地 人 £i. 2 へ善人といふ困り へ善人といふ困り 8 **人將は馴れた筆さ** 一度よみ直す恐っ 7 0 ち は 恐ろし 3 け をとり りなり され やられ 4 T 餘 れ ゐる 5 ず る L る 3 る 0 鹤 曉 宵 心 宵 曉 心 曉 心 曉 宵 聲童明府明童府童府童明

Ŧi.

五五五.

19 美報 鐘

人けてゐる

ひ厚春霞 与司着てゐても 银 大張富仲福 = 八風は 7 より ラ ぼ T 1 がに をするに来て の鐘 6 \$ 0 0 鐘 高 25 い自尊で 敷と 塔仲 \$ 7 高福壽、 る暗 侮首 ぞせ昇て 1. ま どを でへぬる < 壽なれら出あら力紙ま 心 司 りれ瘤鳶ひ地 天同同同豆同烝同 葉同彩

秋

1

0

隅

攻 紅時

山

L

< 水

ちに 持

び消

史翠與浮與

呂竹郎鬼郎

題

任 0

鬼

國

天

(地)責

の葉書 感今日

つ母がは 夕陽

嬉口

を

てれけ

呂好郎

\$

ち

2

與

Ш

地

撃の安湯

女の

の噂

2

天

光

がら逃れて

H が本さ

果に

3

生の

まさ

3

の果

ぬな

人佳佳佳

か貰

噂

十日戒儲けるとこ十日戒儲けるとこ十日戒去年の香具師の中下車惠方は知らぬ アード車恵方は知らぬ アーボス はいたばんあとの妓 寶寶途ほ十十十醇吉雜 ふての 兆の 雜川 誌柳 ある。笹斑け サ けて 7 \$ 天王 連 ラ to 0 れ吉 0 7 兆 寺 との妓が いた妓が との女が と **ただけ** ひお で限に 句 つが値ぎ 會 知 を のけ か こら買 れてがら きりゐり 7 n 大 れ旅る額とれひ 阪 美同秀 同同鮎同同同靜同 觀同 津 月 生 峰

波 人佳 佳 佳 質 月 胃箱 0 題 脇を病の菓子 た + 菓子 螢 H 菜 ケ池 で薬を

爪 7 濡 爪紙 1) 彈 れ彈鳶 ス 7 K L 時 7 スツ 社柳 9 IJ に ぎる 猫 屋 句 大 る鐘瘤り 阪

秀佳佳佳

子 友 が 吞 於 刀 IJ 6 根 山 3 た 與 病 b る == 娛 郎 良翠 樂室 選 子竹

つ包装のままで夢 駄菓子 馘 菓子屋 及 題 ムの噂、 噂 1. へ遠慮 疃 0 6 0 い箱積 \$. 菓ぬ 3 大子 折 びしさよ れて 0) 史 る 風隅 呂 縷 宗史浮 ま 好 夫呂鬼 3

月

+

H

於葉光

居

須

临

豆 秋

報

天 地

爪

一動・最大がる空枯がる空枯が 草 の輕のばに 鈴い黒か風 が銀いりが 鳴の力なあ 同同同角同 嵐

雜川 誌 社柳 梅 H 廻 誌 天 阪

題 土いるら を汽車 2 1 の膝 男土土 と母 い故 禮 母 1 がは話土郷 を 0 產 ナ 0 土へ 窓か 土産 産ッ荷産供 願 の産 旅 な を のル物提目 0 5 6 ひ 20 背負 小届紐先巾げを空 7 渡 0 紐土た H は を T 3 3 如 選 すら解つと來ま晴 豪な光 てな解香産 III 所り 1 村 きりるしれ 月 同鮎同卜同靜同白 同觀朔同正翠大美 津 報 月風 風陽線正 居

(地)石ころけつ 天)石こ 席 席 題 題 ころの道 れ話 表情り ってう 表 石 る れしはこれしはこ 情 ころです あ 2 る げ 紅 與美翠 三智 郎子竹 介

之

選

美情のと 顫 ・笑顔 のうま 酒の表情が要る点一酒の表情がある点 す續番亡 け所人ず ま史前史 紅る呂田呂

— 59 —

停電にねづみそろ~~ 次 一十日 ねづみ又根氣試しのや しばらくはねづみあんまり 電 題 ね づ S 3 第 浮か 5 重 # いお餅に JL [11] れ 姬 出 3 ti 田 14 同 4 同水 報

車

簸川 川柳 力雜誌 部社 大 地 句 師 走大

月 + Ħi. 蜜 H 夜 於今市 雨 西泉寺 舟

思出も

1

か

2

ぎ食

柑

を

の冷

たさ手

にふれ to

頃

0

3

だけ など子のしもやは られた密相 しもやけ へうれ ば 3 柚 き乙 をい Ħ 子 とし を 0 香ら細な 处 綠好凡華虹章光 大同 朗 助郎恩村路泉野

門二門門札階札札

り門札無 肩

0

わり

4 切請

ぬ逃

1

大法螺

法

とは

知りつ

欠伸 ム話に

L

3

O

りこま

れ

題

法

蠳

大

朗

から

を

音ので

1

y

育ちなり 7

らの街のはずいくあの娘

のはずれ

へ寒く

消

0)

强

題

札

之

助

はラ の手戸

ブ 札無

V

及

0

法通為チれ

りでと

L

光章莲好雨虹章

舟野泉村郎舟路泉

人

螺

母 法

親

税の法螺も子供はつま郷吹けで、虚偽の世界

まみぐひ

傷の世界の

灯や淋し

螺を吹く男の

家華ぬな淋

札を

草門門

一権の 門札に妻の があり

名も

太添妙

秋新蓮

雨庭經け

<

ぢは師師眼 天 地人 走も春 7 け 門 2 ・暮れだら 札は淋し亡夫の 題 師 ギ と師 H 走 12 走の風角 足 7 冬 飾 の風 1 0 師 ち かい 走 走 見る忙 ま」 か な L る 3 ばし やし懐 好 3 札 手り 凡綠好凡 選

鏡

河冬賣服料のし 仙と母恒は 猫と 吹雪する 地)淋し 出しの 戦 歳 末 する夜なり戦茶の 出る子の健 康 を 出る子の健 康 を 多の 陽に枯木寒 さをく つきりみせ 2 まる枯れにはなり、 と影を 湯氣 雪去風 た 12 をに 沙 多空 折 らなもま 9 鳧 1) ちせ か 華凡華雨同同綠 凡雨 之助 村愚村舟 愚舟

門札 がつちり豪家の朝 な動 6 り八あ き等る 章凡好 泉愚郎

題

ほ

凡

愚

女

舟村

1

郎 朗愚助郎愚 選 (後)黒子大きへ先生に 親 しょ(佳)黒子大きへ先生に 親 しょりがいった ないがった かん 黒子 大きの煙を吹いる かい は 黒子 親も娘 片頻 阪 4 大 共に氣にやむほくろ 111 紅 唇なま 柳 0) 會睦月 1 80 か 例 會 吹く れ ま 子あ os ts ついかこ

る瞳れ

舟

雨同同綠好同雨華

之助郎

六 阪

丸

鳥

利

生

報

終雨好雨華綠凡 之 助舟郎舟村助愚 着 呼 流し 似た歳 惚れた 袖で 才 才 才 才 (地)奴 今の チ チ チ チ ボ 3 袖 3 3 3 3 いかか チ お L 題 手ゃかな中におち の舞妓をオチョ + なと云へばオチ + + t + 題 おさえてオチョド の皮 才 2 ンの のやうに 一條流灰 チョ のお手 0) 着 才 夢は舞妓 * ナ + しで 才 才 辯 3 チ ナヨボ スは派手 チ t 來て正座 13 3 いもの = よぼのしれと心 マンやつて来る 6 + ボ = ヤ よ 使ひ か + に霜腫 < 1 3 叩くなり た 研 す儲 得返 出 ある れる 夢 b るけ れ 1 出 來 郎 郎 青同芳 聚 利 芳 栞 君 芳 利 柳 同 青 方 選 選 路生 路 生一 女一生秀正

純喫茶 病室 輪に吹けば女の膝のに 河 人)肋 人)包ませて 地 人)買出 馬に 腰 屋)足立 抗主 U 0) 臎 似て 空氣ぶくれ上つてデ 骨は鎧戸 傳つた仕 12 向 0 しに行く北風 を 0 當分なほ 芦屋夫人は肥えて ぬ身 \$ 落 外 7 1 ットに火を 0) 事 にプ L 帶 似て 値 7 端に戀が 17 る 札とまだ 0 搜せに < 嫁 型 + 5 ~ 7 かい ズ 0 0 香の ル踏み が鳴 比 -け 出け 出 1 郎 同同同路 君柳利芳路 同聚 選 女秀生一生 生

日奉 對 一般が過一公に出 座 月 H 吟 雜川 禮、 + して厚 社柳 九 厚 H 春帆、 司 竹 女司 原 承春、 をが 句 思寒 ひか 行 用 出ら ()废 m) にて 5 H 承 出 同春 春 張

報

一人ショ

のを

美眠風鐘波峯生

帆

娘の晴着に

母醉

同鮎方

船

中

着着着着流流流流 IJ 羽流流 流 サ で製造してあて、 F. 流流流 0) とを舞ぶ着流 時の窓員も 時の窓員を舞ぶ着流 なった してで 6 に接る氣に の麻 及 1 い寫雀 t 型の 現の 家るも ふ眞 打 0 ts. 0 か ち 2 の人際 風 11 兄裏男なも がつに妓とつ 1 のの長振れな 吹 T く來いて くあるるふあ 内家屋りや しる 方柳君柳方聚同君路同同利同 女生 生 正秀女秀正

(地)関連の時計やつばり (地)関連の時計やつばり (地)関連の時計やつばり (地)関連の時計やつばり 機械には、 機械も 軸 同同 び革)機械一基この一に)機械一基この一に ヂ 機は 步 湯氣を見ただけで機械 館 機 7 動他 = 2 お如 一音に返 アー く機 が好きですと云ふ從兄弟居かなひまへんと汗を拭い 0 九 40 20 ンから家の 機 **卜足踏** 氣取で つけ仕働 孫は芦 0 被 I と母親送り 藍に 吹いた 戀 軒が食ひ んで客を 屋で 運 か 見下ろす 轉 嫁にゆき給 人氣 かり 臺 난 り 來 扱 寄りつか ,海碧 3 あは立 さ出らにた 5 よ 使 れ続 れ U + 郎 青利芳方 同路同葉同洗同柳 同同同同同路聚 たけ 秀路生一正 を 應 郎 生 11:

(住)壁の娘の晴着の 大親の子の振い時着きて道一バイ 嫁ぐ身の晴着へい な妾の眼は晴着のシ とひ出の晴着」ここ お妾の晴着すここ 其目出女れ禮勤給 初誓孝初除指爾行詣夜 (付)初記り (同)初詣 同 同 詣り 額の 等は 月 かのの 雜川 初 0 らのことは厚司 去鐘 詣り兩 題 がき 車 -社柳 6 お三の年 鼻緒 石燈 皆んな達 11 初 兩手に鳩がとまる 人意识目味員 朱塗もう 7 り十手の H 6 梅 れ イに袖寫 來た 0)-る路を雪開 母 籠 き人の母とヨ四つ身頃男引がい 田 認だ 於 あべ 美 を 見 羽の眞 0 4 者であ T 句 のあ 津 れし へる 陽のく けるス嬉 ふ母見落子重国 生 會 初に と妓に 歌を履 居 てくれ が初初 初 つをく もな な詣觸 上詣詣白詣 なのゆが 天 疲るなさけつ見ら り姿れり 0 3 1 美 九 3 阪 b きえれ 津 同同同承 美津選 卜翠夕朔方秀 美 生 鮎白觀 報 津

春

美菊月居陽鐘風眠峯波陽生 - 61 -

地 同 人 同 同)娘の嘘 月の を思だ を思ひまれた子に立 晴着母 少し、時着 まじ の手 妓 好 母が さびしく きな晴着をきせてや 子先がひつす 居 てく 暗 か 出れ J: ムり 來 1) 同方白斗朔夕 眠菊風風鐘

> 天 地

> 粉粉

ぬ泪

でにあ

0

あ

つた

2

年 力 吟 句

お年年ま年まれる をく E E をへ 玉 題 F 貰子女 つがて は の中 今 ば 牛 年 叔父さなり " 1. 玉 チ ほに はやを IJ 4 重 2 \$ 借 か 5 座ら 1 is. 7 貯居 7 さなる金ら置 ま 3 b 箱 卜觀白靜 明美 津 步居月菊波鐘生

(天)梅匂ふ窓に便りに この頃は相當の この頃は相當の 兄からの便りに 一 兄からの便りに 一 (地)家出して友の (地)家出して友の ま 世 便 に仮のが 煩 カ が箱めい 便 ねばなら 级鄉 り便 b 0 つが たののをの ŋ てそれつか よ 12 子身便 H 82 3 ののをり 力: 厚 ま 稔便便案がす 化 續 粧筈め 1 1 れみ 6 b 來母 同鮎 美同觀同遊明朝靜 靜鮎朔 津 美生 步鐘風波 波美風

鐘 君 惜 别 0 + 匪 吟 天 阪

月

+

==

H

休休休休

ま

たあ

ちじ汗

へみだ

1=

老

藏

相

は

芝

工生

ま秋

草休行ぎめを

の憩くれてふ

上所女雲ゐ

遊觀明觀卜靜斗

步月鐘月居波風

0

0

·6~

ぶるを

(軸)休憩所(軸)休憩の

憩慨土

の土工

憩が

ま 自

> ぬ煙草 一寝ころ

2

力:

8

れ

し御 3

靜

波

萬興金切眼春春樂 才三だらが秋秋屋 家郎けれ眉のは落 て、 心ん離 券を とが川旬のせの園 月 0 句を めタ 御 六 2 眞柳 會 異名のにを作って笑顔 鐘 で、 鄉病 H さ 里氣 んを つて 德 篤 於 にを隅 夜 6 鳥 L 本 頂 专 0) \$6 惜 ~ 7 社 慰 きま 見 お 别 0 事 るか隅 せて頂 婦り こと 0 20 務 する意 L 小宴を開 所 たっ K なる こう 勇多子 味 1 に於 皆 様に きま 報

鐘秋光柳秋郎光 お店願二若指日の大きがけ杯那の大きがけ杯那 指日〇歌 るのの 0 0 除○○カと指が おやて召旦題造の 00 まかいす またと那 9 11 ○ 道 しと且の 7 い旦那は オ名顔 5 旦 前 か 頓夜 ンがが 那でを太に那を 堀 抱旦よ棹座 姉赤功見たし 深 那 から にがを當丸い 川、 らがば要さ す折立らいな 7/2 奥 Ħ. れ出せりれほるれてず型あ 野 秃 る双同榮春十 史春豆艸里 十智惠 山 十選 報 呂秋秋樂九 魚 壺光柳子

白白首白白 粉粉だ粉粉 がをけをを

0 塗ぬ 題

4

U

な 粉

待

7

粉が

答は塗

お

おとかま

のので

朝顏通

17

鮎同觀

話が

運は

ま 0

ユニ

なら

2

與 め與 5 を

る郎

ほ

もせ

夕春春汀春與

郎

なさ

撰

は

< れ

す未

卜 白 游

月居菊步

なな氣亡る

とに

廓姓婦淋

ス 惚飲 夕明 日國 夕鐘のな 2 多子 日け 雜川 子 國貨 さん人のご 氏 下 唇 はまだ喰 笑つ 誌 さん首を 苦 組 L 八下唇 社柳 0) んで 勞 やうに夕鐘 を 夕鐘か 道 で鐘 知 もり しへのに 堀 夫 話 わ 婦部 こち のが 句 1. 足近も と寄汀か を もど 元 言なれ柳な そ ま ひな ま 3 9 ず氏 9 0 阪 3 1) 麏 同同春夕同春與春春同與同汀

秋郎秋光

郎

光鐘

人と

ぶ來

玉い寶霰

来顫塚のてを

音歌

をに

角豆夢九不不汀德史

秋裡天凡角柳三呂

のし

てへ

れるるる

け す

け 解霰 餅 禁 監 報 報 報 報 表 す る 街 報 報 表 す る 街 報 報 表 市 る 街

つがし

聞なかな

悪友は袂の底が悪友に借りがな悪友に借りがない。 を 歴 を が 應 を 悪友に借りがない。 惡友 悪友の悪友へ足 のさびし 頃 6 と云ふ 出る 結 0 題 りがあるとは 頃局 道 H ホオンの街 駄 か悪 い信 を を は 顔とな に 心み悪悪 H ら友 那 來 を 0 友友 判妻たへ揃 1 だ打承あ 素 義 を知開誘え 1 し明知 く借ら店ふらけたけせ笑 0 會 ず 友れ 1 b 3 ひ 日 れ 光 不徳與蝶 汀春鮎里一彩角 角 角三郎助柳秋美九六泡嵐

嵐 地 D家出して霰の白ろき道と の気短かな音で霰は消へて)掌の気短 席 題 衣の 通 とそば上 白ひが屋 天ぷら れながら 飲む ٤ 事にし 30 にと臺京村 天 いから 齒 7 70 橋にく天 L 2 7 の停麩 を ない行 越 こ留羅な 七人 min りなき り所屋り 九 元 世同德春桂茶豆 鮎冬か K 間 美扇る

天地 人 同 寝不 おち 寝不足がズボン 不 一足の紙幣は よやんの欠伸今夜も 足 足 0 0 今日滿願 娘の 不 引眉に は銅貨になつてぬる 納顔の 鈴の 音 知る 足 カ 12 U E あ チ 秃 1 山 秃豆角榮艸 間 山秋嵐壺樂音

ひとり者

電雨戸は

あけの窓

の二雨頻

階面階をま

が白に見れ

彩里鮎不玉

九美角虫

し居

+

一階から

見る

雜

沓ぬ C \$

ネー

ムだけ

は立派

題

7

· 10

ど靜都

ろか會

すねた子が二階の一階貸す話八百

屋

題

同 同同同同同 好きな妓 題 6 4 ても やむ感冒 い娼婦 の灯 屆 け を をひ りむ決る 6 點 買 汀 る れ り菊妻 3 U 8 柳 與不鮎桂榮彩不里豆 選 + 角美三壺泡風九秋

> 簸川 川柳 第雜 支誌 部社 高 松 句 會

総倫を誇り が心した。 が念へさい 放さ精力 した窓に冷 ゆく が彈 退 根 りに思ひ思ひ 赞 深の白さにに 友のこゝろよどこ をくばつたとい カ + ぎ野た 月 した道し .0 ľ て事の雲職 放 H 精 るを雪がが ゆ力い な悔遠ああ 後 藤 く家 りひしる 松鶴 高 同綠好朴同之助郎泉 根 笑同大 堂 朗

三光三人秋

晋

川爽誌 部社 大 地 句 會 鳥 根

簸川

b

事

月十 Ti. 日午 後二 事於二時 柳亭 よ 事 富美 乃 家

題

0)

事

から

す

3

通

9 之

松

濤

緣

助

選

夜霧の らなづい 妹 深さに返 2 て妹淋 久しくあ L 事 だ < 7 け笑 T L る 大凡 朗恩

題

郎

歌の切れめへ鼠の摩まねて鼠に開 席題 ンド と風と 段 わた 子 だ さ隱か けわれせ のぐてる 凡 夜晉ゐ氣 同朴さ章 泉だ泉 選

七 金し猫

= 談 0 0

んばしご下からやさしい聲をかけ

3

わ

題

脫

鹤 事嫌

緒

段梯子ころ

げ

ち

\$

るい

ひ氣

綠田

之總緒

ゆるり

3

降

1

思 7

脫夜脫脫

底

脫

線

同

の氣飲

そ つぶ

\$ 題

Ŀ

2 志

ゆ

85

3 吉の

1

庄

介

線は 0) 線

一
背だけ

ぞと

がみ笑

ろぶだ

内いれけ

松大梢凡

た

話

女

は

ゆ夢溜空め見息を 同同 佳 客ら 畑 旅 月 x 席 雜川 車出 つ妻來 題 0 0 12 題 = # 3 頃ご 文 來 0 頃かない。 n ほ 2 社柳 頃 から アてた來にる策た 知驗題 3 か父は 1 日 1. × 句 × 0 = 高 = る題題 = 不 2 ブ 果 を 黄實 4 0 =1. 1 潔に近 知 7. 1 ラ 0 1 1 符はが の借出 途 = 0 3 星 ・はの 台 で程 汚っ 1 時 ル \$ れても好 促默美沒 1 色冷な 樓 七 會 がつ事にてて考 E ン杜たい チ さて拔な 3 のか空 高 國 なり れるけ 3 3 れ 3 澤 6 b £ 知 水 水 春 六濁水梨六水梨 吞濁水青 水 大好綠朴 朗郎助泉 報 選 水水魚果 **粒水魚生粒魚生**

指危積五相もの人

L

拔

行

0)

選

撲勝

女

0) 土 た 百

つた

意俵と

地にも房

が總思は

侮立は忙

れちれし

しず

六濁梨春

絃水生水

濤朗風恩 お茶だけ 風邪藥 流 せ て食 間 題 題 明 7 朝 と出 ち日 X の茶 3 4 6 " 風 茶 L 働だ \$ た茶碗 風 渍 か 邪 カ 0 碗 0 碗 を 12 にば町 晋 大 \$ から 3 てなに 8 るこ す す あら殖 2 3 るずえ る 魚 春濁梨 水春濁

兼兼床 屋 題題 0) カン 天 15 05 晚 位息出 が來兼 れ見ぬ題 とえ枕訊 誘るをき は古裏に れ参返く る株しる 春梨六濁 選 水水生 魚水水 水生絃水

りぼんとうど

====南話電

木木校枯枯庭

うなつの隅

峠の木

茶向枯

屋き音

もをが

留替消

絃

濁水同六

て背

夜

を

ま

たさ

23

水魚

木枯られる

庭

轮

題 解

木

枯

濁

水

議株堂

島

持の

で株

印解解

制散散

7

業 9 b

部氣

散

散

を 席

越

故 0)

に風郷

かをへ

春濁水

果水水魚

知發

題

愈

解

散

帯

選

(佳)初對面條 銀雪 同 同 松臺 便 初 面面 山中 1 文字に 事 對 0 ス 面 面面 芝宮 初 丰 を 窓 ある 手 霜 田內 持無 鏡が 0) 正似問 **靈耕** 子氏 對 にの 清さ 月 L 題顏 待兄 沙 光 面 + 汰が \$ を Ti. 歡 機の 0 H 目又聲話思 迎 の案 妻 句 於貯 4 < を 0 保じ 會 な居残 づ出あ出 線ら 密 (愛 工九 行 靈柳靈文枯心 支店 青春 明子石子庫佛府

果水

0)

2

=

3

ま

6

竹馬へ母汗をか 竹馬へ母汗をか 竹馬の子に行く家 竹馬の子に行く家 竹馬の子に行く家 が馬の子に行く家 が馬の子に行く家 - 明揚 七吟 か鳩て 家を 馬赤く 日社 らとる神教 うにば取 句 渡 がるを えたはりて 邊 曉 く子合省らへ戻なみ 童居有明 れるりりせ 同小史曉一 宵 史 樓呂童風明

再再再再あ再再再 自同 特會は夢でなり 特會は夢でなり 特會の挨拶だ 特會の挨拶だ 特會の挨拶だ 句初 お對 詰 五面 社柳 0 かのけ二再の來馬 若風 つ妻は人會ふて車會 治 i. -たとあも夜へ見は 句 れ路 手引ら引がたな村 初膝 を合た合更話ほを 握はまはけなさ出す 對と りしりせるどれる 面膝 小靈心曉心女同将

明

が思ふ汽 が思ふ汽 が思ふ汽

ね命を ま

ほ 選わ

を

え

わ

を

ひ車

か選

+

見子介え

朗石

ごりそば れ け雀」なに雀いはを る F. 下力 日い借 る軒でで糊 箸戸ニをの" 事に狸」を がてり 心割のツ 忘鳴逃立喰互續出合 れくげちひ 風明府 風童明 童 童 風

樓子府童府庫

雜川 社柳 御 池 橋 句 會 (大阪

月

#

H

貯

行

支

店

かってむはロよのな立 なってるい北 くれまこ 出がを度 が勝勝吟へ 來手手手向、來無叩廻 Ti. る口口口けわるしき 同青星か晤を青いシか わき子る ほ選 る裁

小川 解柳 ビ ル 0 机 るふ若の百お思汽 て 摩若い無屋 1 色旦笑愛なれ出のかてのるらな持里持 や那ひ想りずし旅ほ來箱りれりち十ち 同同里同青シ憲さる同い同か星青九い 路 + 郎

ふ題 活研究會、 執筆下さつてゐます で、 本誌主幹 11 型新聞 御 111 胸讀希 10 柳 解 麻生路郎先生が、 望者は集書でお 嘉賓ビ 競行所は大阪 12 の机 12 内 で 家庭 每號 2 t

み下さい。

ナレ



柳界展望

を歓迎する。 全國川柳界のこと、各地川柳家の全國川柳界のこと、各地川柳家の

視察され、天津に入り和田默然人二月二十日北支進出の爲め北京へ二月二十日北支進出の爲め北京へ

【朝鮮】▲蛭子省二氏(本社客員)は 「本で苦惱されゐる處へ、夫人が 「心臓病で臥せられたので御夫婦共 に枕を並べられ、二人暮しだけに 「はを並べられ、二人暮しだけに 「なをがられてゐる。切に御

【函館】▲村井潮三郎君(函館潮吟

社)は二月十六日東京へ旅行、啞一三味、瑤天、車山、默六氏其他の

【長野】▲「川柳みすじ」創刊號は長野市箱清水八九同吟社より發行さ

【石川】▲「梅鉢」誌三月號より滑頁 総來の銀紙川柳社同人が極力後揮 する事となつた▲河北津幡川柳會 の為め四月より例會毎に本社客員 安川久流美氏出席後揮する由▲金 澤川柳會は解散し北陸川柳聯盟主 催のもとに四月川柳大會を金澤市

> 騰寫刷本を發行された。▲紫烟川柳を募る「煙草に關する川柳」用紙柳を募る「煙草に關する川柳」用紙のガキ、三句限、〆切毎月五日、 秀逸皇賞、宛先金澤市千日町安川 久流美宛。

て開催されるの 古屋のキャバレー 會兼營) 水車君と快談された▲川柳まつり 【愛知】▲水谷鮎美君 一月二十四日名古屋 (へちま會奥町支部 は川柳 へちま會主催で名 コロムビアに於 一、旅行、 一周年記念大 (本社 同 人)は 吉田

二月五日彦根の雪に轉げ」
二月五日彦根へ商用行「すつてん

【奈良】▲大石文久君(番傘同人)は 記元節に橿原神宮に参拜された。 「京都」▲明石柳次君(本社同人)は 二月十五日華燭の典を擧げられ、 京都市西ノ京雨町一番地と新居を 定められた。

集の、十五日全快退院の吉報に接した。 澤市 阪大病院に擬養されてゐたが二月 盟主 【兵庫】▲食満南北氏(本社客員)は

祥月、

農相

松南、

拓相柳之助、

相幸明、

無任所梟人の諸君▲川柳

▲紫烟川 ▲住田亂耽君(本社同人)の令閩郁川柳」用紙 子さんは輝子病院で御療養の効な川柳」用紙 子さんは輝子病院で御療養の効ない。 (二月二十三日午前十時長逝され

[鳥取]▲三鴨美笑君(本社伯耆支部幹事)は盲脇炎にて半子博愛病部幹事)は盲脇炎にて半子博愛病の吉報と勇躍川柳に精進を誓はれてゐる。

柳誌" 鬼、女相動一 されてゐる。顏觸は首相柳人、內 泊廿八日歸阪された▲勝谷山川兒 陸相山川兒、 相都之助、 が松江支部川柳内閣を組織し發表 毎月例會々報が發表されてゐる▲ 號を二月一日發行、 君(支部同人)は柳誌"芽生"第五 社員米村あん馬氏等と柳談の上一 二十七日出雲大社参拜を兼ね 【島根】▲大阪本田溪花坊氏は 川柳風呂=新年號に梟人君 外相巷二、藏相莞路、 郎、 海相比呂志、 法相庄介、 同誌には支部 鐵相笑 商相 末松 月

十三名、

中

に、

中 々たる

ŋ

小

島町

0

集

ひは

三月

額振れの

集り 斗通、

0

あ 雨

喫茶 され 月 父と相次いで 山 句 陰新聞 H た▲廣江 園にて開催 面 岡 元 周 崎 且 て 遊さる 祥月 週間京阪、 喪はれまし 天痴人君は令弟、 號に新年 月 ▲奈良井柳人 Ŧi. ▲支部 君 日 (支部同 湖畔 雑詠を發表 大和、 た、 例會は如 みど 人)は 謹ん 君 1) Ш は 20 吟社 會であ だけ 君 職 月 K みんな顔は

风呂社

-0

は

誌

Ŀ

座談會を計畫

され

介氏

0

臨席開店

披露を爺

ねて

句

會

3

▲本社

か

いやし

盛

耕朗

君

な

年よ病 退院さる 戦学から 一十週年 八日) 床 つた▲今市山 中であった大地 濱田 新しい兵隊さんに附添 記念句 ▲尼綠之助氏入營日 會 の計 泊さる▲大地 根病院にて昨 同人章泉 畫中なり

支社長)

は、

視野二月

號に

[東京]▲福田 を催さ 日臺灣の

山

雨

樓

君

全

社

れ

(高松吟社同人)は去る一月廿八 典を舉 大吉 住所 (高 0 あるの 成笠井 【香川】▲平井與 二月 は二月 丸 め歸省目下德島縣板野郡應神村吉 龜、 t 八八日 善通寺方面 兵 日 太郎方に療養看護され 鄉里德島 夜大阪を出立、 郎 夫人病氣 君 (本社 高 同

松吟社

人

は

同じく

初

春

げら

れまし

▲渡邊笑朗

君

H 君

の佳日いと盛大な華

燭

0

意を表します▲尾添好朗

二月三 する 移 \$ 五日 食堂にて、 簸川 1 られいと朗らかに水入らず A ムと 元 愚 午 郡今 H 且 0 華燭 t ブ のこと 時 は ŋ 17 市 新春句會を開催集る人 より 開店 0 れ 食堂川柳享 町觀音寺前 典を舉ら T ▲大地吟社 るるる され、 新店凡恩の れ _ 別名を富 新 0 新居に 店 同 の新 機張 人山 月 プ 17 + れ +

【德島】▲姬田夕鐘君(本社 喫茶さがしつか れ た丸 へ擦ばれた 龜市 同 人)は 松、 のた 「純 人 7 で吟社 部で は三月 筆された▲柳友會二周年記念句 律川柳に對する覺書」と題 鳥双享 銀座 きやり吟社の、 人君は板谷生命 吾妻橋クラブで催 大森區市 京本社營業部に榮轉の爲め東京市 催 出 0 山下で催 主催で三月八日夜五時半、 版記念大句筵は川柳おも 3 + 君 れると▲ニ 五日夜豐豆海岸朝日俱 は東京市 野分町三十八へ轉居

3

れ

04

浦

松江支部の米江庄 今治 川 二月八日大阪出帆、 【愛媛】▲青 柳 た。 日夜本社 の川 と題し ▲石崎柳 柳みす 木史呂 今治支部句 て 毎號執筆されてゐ か誌上に 石 君(本社同 君 今治に行かれ (本社 會に出 「俳句 同 人)は 人)は 席さ 3 會は 窓、 35 錚 啞三味、 四浅井商店內

玄樹、

半花、

二月十一

H

催さ 戀坊、

れ

神

田

區

東

陳居、

花 開

今治支部では 迎 歌 月 心迎句 = + たっ 若、 花戀坊、 肖 催 3

へ轉居▲第二回生長 社人會は二月九 出太丸句 平吉、 して執 つった 垂等 山雨 より東 紺 沼 川 百自 東京 集 日杜 屋町 ▲長 瀧 會 由 樂 懷 H 柳 U 樓 0 4 0 催さ を挫 塚越正 ス停留所 場を開業され 君(本社 雨句集」を刊行される。▲增位汀 路郎主幹の校閲をうけ 【大阪】 高角嵐 二十六日華燭 柳 別句 1 は二月二十 を執筆大阪朝報 全快を祈る▲平井春光君 ノ三二〇飛鳥莊 でを掲 の歸途寺 は樂業往 に追突され ▲青木史呂君 傷され 會 は二月 れ 光氏(本誌指導講座執筆者) 城旺 たっ は三 君 編輯長)の弟楢雄 橋本綠 西の四辻南ビリ は東京市荒川 九 = 月 んに健筆を揮はる▲大 來二月號に「藥と川 た、 田 た、 路上に轉倒額面其他 日 H 町 の典を舉げられ 西田艸樂 八 夜水府 雨 鄭附 目下自宅で養 (本社同 日世間 丹 | 轉居、 Ŀ 君 波路 は「幸福」 一本町 近にてタクシ て近く 氏誕辰記念 君 區尾久町 社 晋 人は ヤー 四 君 角嵐氏送 「本社 居に於て (本社 一丁目 は撞 務 福祥 二月 F 療 柳 は JII 丹

の福

岡

支部

3

れ た▲

田

波新聞賛助員會があり難波温泉

卷頭 に付訂正する 刀根山病院を退院された。 田源鬼君(本社螢ケ池支部同人)は 元町四丁目二三五新見世間晉▲福 「梅見」禿山選、〆切二月十九日奥 メ切三月十日、 枝呈賞、 柳壇三月號課題「軒店」世間 三丁目六四へ轉居▲なんば はるを君は大阪市東成區南生野町 區曾根崎中 誌大阪市内大賣捌店)は大阪市北 にて催された《大賓書店 月二十一 此花區恩貴島北ノ町二十二へ轉居 客員) ▲本社大鐵支部畔柳社の 入湯された▲關 ○三へ轉居▲中村與六君は大阪市 主幹の旬中媚築は媚薬の誤植 は大阪市東淀川區 は大阪市 四月號は「薄利」「觀櫻」 日南海沿線股ケ池水客居 轉居▲鳥山 一ノ二九へ轉居 宛先大阪市浪速區 住吉區田 本 雅 幽君 步氏 國次町二 邊不町 小集は二 (川柳雜 は ▲前號 香選、 の市場 ▲岡崎

辨天座春のレパートリー

花 御 歸 館

0 青 空

ングヴィダーの 薔薇はなぜ紅い

近日公開

大

阪

Ŀ

六

加

旗

徽

章 店

年一

本陽氣な笑ひ

ロイドの牛乳屋

マルレネ・デイトリッヒのグーリー・クーバー

珠の 首 飾

堀 頓 道

x 七 カ 各

寶 種 对 徽

章族

柳 雜 誌 社 指 定

]1]

是非 柳談に時を過しませう 沿線花見のお歸りには お 立寄り下さ 1,

南海 本線玉出驛西二丁

キング喫茶室

-68 -

キャロル・ロムパートの

近日公開

電話南二七八番

×

×

◆吾社は由來川柳の社會浸潤を

提唱し來ったが其の働きに於い

物足らぬものを抱いてゐた

に低迷しついあつた、不自由さ

じてゐたことは、

實に此に限界

ちに從來滿たされざるものを感

川柳が持つ威大なる誇りのう



輯

柳

汀

つたっ もとに川柳の雑誌があるといふ うとしてゐたことは與望ではあ ◆川柳が、川柳界以外に伸びよ ることは一つに我々川柳人に懸 によって而も之れを善導活用す ことを我々は一層自覺すること て行はれ難い法的な解決が残さ つたけれど、それは云ふべくし つてゐると思ふばかりである。 てゐた時代の餘韻でしかなか

を持つ事が出來たのは偶然では

適用のもとに、

新らしき出發點

◆我が社が有保證の新聞紙法の

着實に、其の目的に向って邁進 ◆吾々は今後澤山の仕事が一度 に負はされた氣持ちであるが、

ではなく、川柳界の誇りである とが出來る様になったことは、 回、そうした範疇を脱して、川 ことは事質であった、 つに吾社の誇りであるばかり の本質的に最も忠實に盡すこ 然るに今

今斯らした惠でまれた諸條件の と自負してゐる。

吾社の目的を貫徹せんとする意 下の柳人の理解と支援によって 共にせんとしてゐる幸ひ、滿天 葉である、 することは全く一同が誓つた言 御期待にも添ひたいと思ふや切 志は自から明瞭であり、今後の 意と實際に感激して吾々も行を ◆本號の遅刊は汀柳君の個人的 質である。 川柳界に裨益しやうする熱 而も主幹路郎を擁し (雨迷)

御寬恕を乞ふ。(路郎 支障と小生の旬日の臥床



社

◆本社兵庫支部設置 ◆總務待遇 橋本緑雨總務に復活 幹事濱田久米雄

◆本社玉造支部を廢し上町支部と改稱 ◆玉造支部幹事清水友帆を同人名簿より抜く

改製、移轉、切べた製活字十四字 雜 合案内、柳書廣告、その他し前金切手代用可) その他 内

路郎先 生染筆

で頭布致します。短脚を川柳家に限りた 一技額小物、

小軸箱 申 込 では前 物入 五式台 金で 圓圓 本社 . . 短額 事 册 務 所 參拾圓

殘

本

投 句 用 筝

用下さい。程度が関係では本社正規の此用箋を御用下さい。 Ti. 御投一

は 本社 11 切事 手務 代所 用 * मि 11

申

込 + 枚 綴 册 (送料共)

III 柳 家 名

宛 現姓様上 てゐます。 住 名 JII お願ひ申上 本社 所 . ガ 柳 雅號 ・職 家名鑑 キにて 事 務 業 ・生 左 ますっ 所 御 . 0 0 內 簡 年 報 通 作成 位 單 月 1 汀 な H せ E 柳 柳 . 歷

左路郎

通

一枚金4

式拾錢

+=

加二十 錢 錢 送 錢

先生最近執筆の新調です

第四

卷 卷

より

第 第

+ =

卷迄

一册卷

Ŧi.

錢

より

迄

麻生路即先生執筆

111

柳

手

拭

上ます。 はすので、 い

0)

左の通りで分譲申

申

込

本社

事

所 送料

錢

申込

は前金で

本社

事

務

所

懸

11

柳

本 は

特

賣 務

卷より

第

用課

紙 題

は官製

25

ガ

丰

化

粧柳

壇 H

切

三月十

明

0

品

は 記

度記本 報 四 社 係 成 温 鹤 青 見 橋 通 木

Ti. 史 四 呂

句 案 內 0 其方は

都左

宛

先

壇方

御記載 取掛

讀柳 誌 を 作 る人、 愛好する人

必川

秀逸 阪 事 化麻市 數 粧生西麻 何 新路區 生路 K 薄 社氏玉郎 柳方出氏 壇 本 謝 を 呈 通 す 東

第十

卷及第

金參圓

卷

金壹圓

Hi

拾錢

卷まで。 柳雜誌の合本第一

送料

大阪

内

册册卷

十四錢 事務所

三宛

ノ先

大

=

御申

込

は

前金 市市

10

本

祉

III 柳 俱 樂 部

京 市 一領 达 部 In. -11-松方 錢 俱 • 日 樂 町 送 料發 部 四 社 錢行

發行

所

區

Ŀ

町八

研條

社〇

JII 111 (毎月一回發行 行

東同見 京封本では王記望い 2 柳 初心者 ナタは絶對 色ある本 研 者は二は 究 0 誌 錢ん 元に見 入門欄 0 - 半 切 創 年年册 手 逃 作 + を欄金金金金 L 枚 一世

圓圓錢

誌き本部社や町廿 社や町廿数 事リニ五頁 発いノ終 務吟ノ錢所社一

四東每

六京月八豊一

雜柳田

判每

(次所)

社 柳壇

宛 雑 先選吟大 者募タ 大本 募 阪社川る タ事柳 利務解用 新所誌紙 増 同ガ 人丰 擔 當

柳雜朝家吟 町大選のを 一阪発募が 大目天 を 阪增王增歌用 **壇** 朝位寺位迎紙 報汀區汀すハ 社柳上柳るガ 柳氏汐氏

111

(駅におい) 々人の係關社誌雜柳川

今里支部(大阪市)幹事市場後食子今里支部(大阪市)幹事店 四 白峰和底支部(大阪市)幹事店 四 白峰和底支部(大阪市)幹事店 四 白峰紅大鐵局支部(大阪市)幹事店 四 白峰極大変部(大阪市)幹事店 谷 紅紅炭部(大阪市)幹事店 台 紅紅炭部(大阪市)幹事店 台 紅紅炭部(大阪市)幹事店 台 紅紅炭部(大阪市)幹事店 台 紅紅炭部(大阪市)幹事店 台 紅紅炭部(大阪市)幹事店 井 英賀夫

兵臺十市簸竹伯新光今上 笑治町 原者居 庫中三岡川 支支支支等 部部部部支 部部部 神臺大大鳥 (廣鳥愛大今大 戶 医医根 鳥取媛阪治阪 市灣市市縣 縣縣縣市市市 濱宮淺平後町三木永月廣 田內野井藤田鴨村田原原 米耕牧春大承美默里

雄朗人光朗春笑紅九明人

前前安窪谷田米川川龜小岡大大大島伊曼末 田田川田脇村村村上井川田西谷島山藤 久銀 孝志 三 長五 嚴 五雀流波素之ん花太晨 面三花濤一彦 健郎美樓文介馬菱郎修武子郎村明步造

大大奥新西西西長原石市石岩 森小藤蛭篠柴食 西鶴野見村村 谷 崎場曾崎人 林里子原谷満 次川 沒根 不 享 八喜禿世明山 わ三史柳食民柳 東浪好省春二南 歩由山音珠月を汀風石子郎路 魚人古二雨郎北

眞青明阿江後近朝福松熊村中中竹立吉吉岡丘田木石形 藤藤田田下谷松澤西内井川田田小 お機登 壁水某遊幸史柳一 つ青 新鶴柳 夢濁さ見美 壁水某遊捐呂次杉る 兒勇水峰子紅裡水む女坊人車人舟

同 首須關妹毛廣廣東日姬平平平水宮喜北 人 藤崎本尾利原田谷野田井井井谷岡多山 竹豆雅變九會六開華夕三春蒼鮎白春悟 楓秋陶人波人浦路水鐘郎光太美峰秋郎

投 稿 規 定

▲「川柳塔」への投句 各地會報は半紙判 「近作柳柳」は全作 認め、 原稿紙に清記の事 は同人に限る。 家の雜吟を募る。 種各題必ず別紙に は同型の厚紙に各 投句は總て葉書又 を明記する事。 住所氏名雅

募

十三卷第五號課題

三月五日締切

(各題 + 句 以 內

に前金切

で

御

市 田 亂 沒食子選 耽選

何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記(一年分)には定價の外に手 敷料 十錢を申し受けます ▲御注文に便を選立てますメイン

便を差立てますが御不在中にでも預ける様に願ひます、

但集金郵

支に

は 便

誕

生

十三卷第六號課題 11 月五 日綿 切

昭 昭

和 和

+ +

H H

1發行 EP

1

月一 回卷

二日發行)

三丁目三六番地

年二 年三月

月

#

Ŧi.

刷

第

車 妓 水 (各題十 谷 田 句以 翠 鮎 內 美選 夢選

一文章は二十字詰原

稿紙使用の事。

電

舞

各地柳壇(會報 近作柳樽(紫)麻 號 集 生 路

> 郎 選

事

務

所

▲書體はなるべく楷

書「川柳雜誌原稿」

每

文章(評論研究感想吟行漫文) 社 告

▲投稿其他につき御

問答はすべて返信

封入の事の

社 粉

切

は

事務 所宛

店書捌賣

締切は嚴守された

と封筒に朱記の事

轤

行刊法紙聞新證保有 載 斷

發

科科金

行 大阪市西成區工 大阪市西成區工

玉 王

出 出

一本通三 本通

一丁目三六番地

郎

柳 話

七

都)三宅 (名古屋)靜觀堂 伊國屋 ぎュ三味堂 (神戸)米 原京)か、東京堂かふ巖松堂 ・大寶捌 大寶書店 社東 大 阪市天王 京 市 蒲 寺 區上 田 店店工 米田、 米田、寶文館 (函館)石塚 (京) 一明文堂 其他 市内 各書店 -186 一沙町 女 雑誌東京支社 な場所一三七 を場替大阪ヤ五〇五〇番 電話南六のの番 丁目五一番地 誌 價 半箇

定 部 麥 拾

臺箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢 年前金(特輯號共)壹圓八拾錢

御

錢 料告廣 一報下さいますればては事務所へ直接御

金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金あります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封送金は振替口座大阪七五○五〇番へお拂込みになるのが一番 相談に 應じます。 集金郵



林

道

藥

品

部

来る様になったのであります が、 をして居たのでありますが をして居たのでありますが をして居たのでありますが をして居たのでありますが をして居たのでありますが をして居たのでありますが をして居たのでありますが る内田 GLUCOSE LUCOSE

薬品店にても販賣して居りますがハガキにて『川柳雜誌』に依る旨御記入 御申込になれば早速代金引換にて御送り申上ます。

酒

白鶴をい

つもきらさぬ

淸

13: 11 白鶴の方に幹 よろこびに添へて白鶴 親 鶴 8 から 白 緣 鶴 ٤ な 事 は 5 は な 極 b 屆 的 82 5 け 君

鶴禮讃

白

攝津灘

嘉納合名會社釀

